



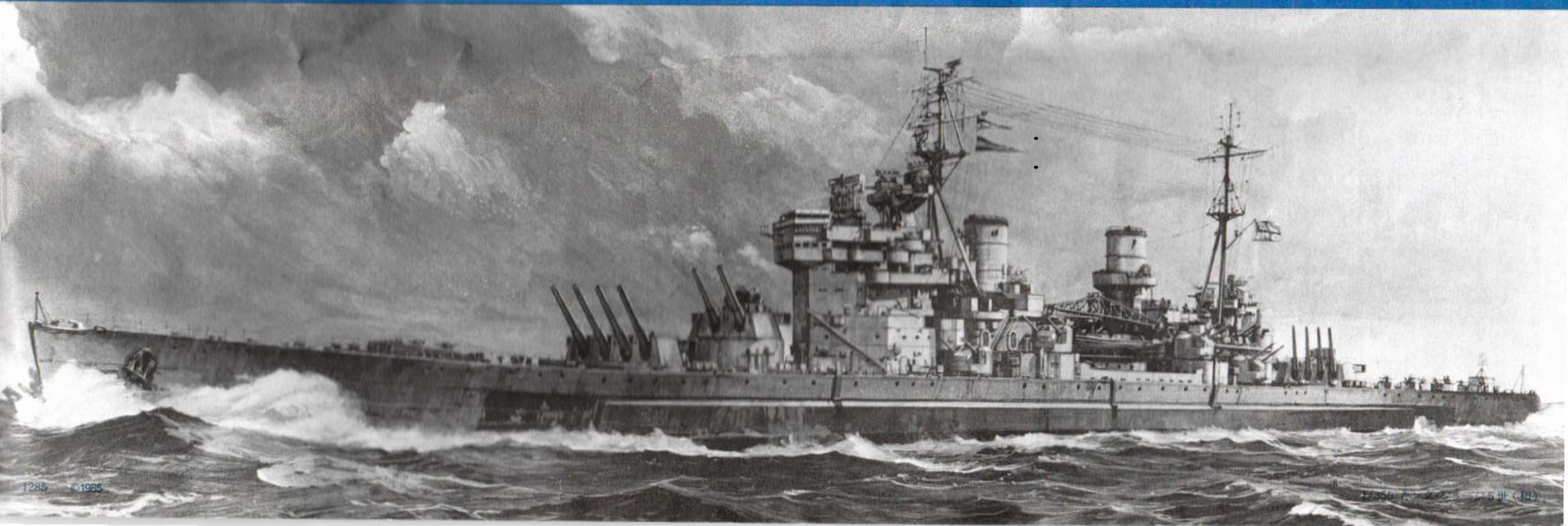
ITEM 78010



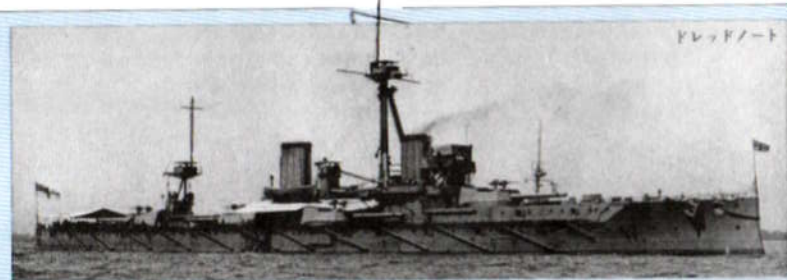
◆イギリス海軍戦艦キング・ジョージ5世◆

〈主要目〉	主機……………バウソンス式ギアード・タービン
全長……………227.1m	速力……………29.2kt
全幅……………31.4m	軸数……………4
吃水……………9.7m	兵装 14インチ主砲4連装×2基……………8門
基準排水量……………35,000t	14インチ主砲連装×1基……………2門
満載排水量……………44,160t	5.25インチ両用砲連装×8基……………16門
出力……………125,000馬力	2ポンド8連装ポンポン砲×8基……………64門
アドミラティヴ・ボイラー……………8基	40ミリ4連装機銃×2基……………8門
	20ミリ連装機銃×6基……………12門
	20ミリ甲装機銃……………26門

1:350 BRITISH BATTLESHIP **KING GEORGE V**



KING GEORGE V



ドレッドノート



オライオン

英D級艦の歴史

1906年(明治39年)に完成した英戦艦ドレッドノートが、軍艦史上、画期的な戦艦であり、その威力の前に、従来の戦艦がことごとく旧式艦と化してしまっただけで、あまりにも有名である。

このドレッドノートの特色は、それまでの戦艦と違って変わらない排水量と建造費の枠内で、主砲の火力を一躍2倍とし、速力も20ノットの大台を突破した点で、これは主砲と準主砲(副砲)の混載をやめて単一巨砲主義を打ち出したことと、主機に当時実用化の段階に達したばかりの蒸気タービンを採用した英断によって達成された。

以後、この設計方針にならって各国が建造した戦艦および巡洋戦艦をD級艦と呼び、さらに主砲を34.3センチ砲以上に強化したものを超D級艦と呼んでいるが、このD級とか超D級とかいう言葉は、ひとり軍艦の分野だけでなく、一般的にも強大なもの、規模の大きなものをあらわす比喩的な表現として用いられるようになった。例えば「彼は超D級の人物だ」とか「今日の映画は超D級作品だ」とかいった類いである。これをもってしても、いかにドレッドノートが画期的な戦艦として評価されたかが分かる。

さてここでは、ドレッドノートの出現以降今日まで、各国は何隻のD級艦、超D級艦を建造しているのだろうか。世界中を見渡してその隻数を調べてみると、まず今のイギリスが56隻で断然トップを占めており、次いでアメリカの32隻、ドイツの30隻が続いている。日本はずっと落ちて14隻、フランスが11隻、イタリア10隻で、以下ロシア7隻、オーストリア・ハンガリー4隻、スペイン3隻、アルゼンチン2隻、ブラジル2隻といった順序である。他にトルコとチリがD級艦を各1隻保有したことがあるが、これらは元ドイツとイギリスの艦である。

このようにイギリスの56隻は日、米の合計隻数46隻よりも多く、大英海軍が大戦巨砲主義の時代に君臨していた様子が、この数字からもうかがえるが、以下、ドレッドノートに始まって条約明けに建造されたキング・ジョージ5世級とヴァンガードにいたるまでの英戦艦の流れを、かいつまんでたどってみよう。英海軍はドレッドノートに続いて、戦艦なみの砲力を有し、巡洋艦なみの速力を備えた巡洋戦艦を創案したが、その系列につい

ては後で別に触れることとする。

ドレッドノートの次に建造されたのはペレロフォン級3隻で、さらにセント・ヴィンセント級3隻、ネプチューン(姉妹艦なし)、コロサス級2隻が次々に建造された。いずれも30.5センチ連装砲5基を装備している点はドレッドノートと同じだが、逐次改良が加えられ、常備排水量もコロサス級にいたって20,000トンに達した。ネプチューン以降は後部の2砲塔を背負式とし、中央の2砲塔を梯型配置にして、全主砲の両舷発射が可能となった点が注目される。

これらの艦は1911年までに完成したが、次いで翌年揃って竣工したオライオン級4隻は、主砲にその34.3センチ砲を採用して大幅に威力を増し、5基の主砲塔はすべて中心線上に配置された。超D級艦の出現である。34.3センチ砲搭載艦は、続いてキング・ジョージ5世級(初代)4隻、アイアン・デューク級4隻が建造されたが、次第に艦型が大きくなり、アイアン・デューク級では常備排水量が25,000トンに達した。ただし速力はドレッドノート以来、ほぼ21ノットの線から動いていない。

この頃、英独の関係が悪化し、大戦勃発の気配が濃厚になってきたため、イギリスは折から外国向けに建造中の戦艦3隻を買収して英海軍に編入した。エジンコート、エリンおよびカナガがそれである。3隻はそれぞれ主砲口径が異なり、エジンコートは30.5センチ連装砲塔7基を長大な船体の中心線上に並べた極めて特異な艦であった。主砲14門というのは戦艦史上最多の記録である。

さて、アイアン・デューク級に続いて設計され、第1次大戦が始まってから完成したクイーン・エリザベス級5隻は画期的な超D級戦艦であった。主砲はさらに38.1センチ砲に強化され、4つの連装砲塔を前後に背負式に配置するすっきりした形になったほか、出力も一躍2倍近くにアップして、25ノットの高速を発揮できたのである。続いて建造されたロイヤル・ソブリン級5隻も第1次大戦中に揃って竣工したが、このクラスはどちらかといえば大きな特色のない地味な存在であった。

以上が、ワシントン軍縮条約までにイギリスが建造したD級戦艦である。ただ先に触れたように英海軍は、これらの戦艦と平行して巡洋戦艦の建造を続け、その完成隻数は13隻に及んだ。最初のインヴィンシブル級3隻が1908年に竣工したのを

皮切りに、インデファティガブル級3隻、ライオン級3隻、タイガー(姉妹艦なし)、リナウン級2隻、フッド(姉妹艦なし)と建造され、最後のフッドの竣工したのは第1次大戦が終わってからである。このフッドは、第2次大戦中にドイツ戦艦ビスマルクが就役するまで長い間世界最大の軍艦であった。しかし高速発射のため防御力を犠牲にした巡洋戦艦の弱点は実践場裡で多くの悲劇を生み出し、フッドを最後に、以後建造されなかった。

さて、軍縮条約の締結によって、いわゆる建艦休目を迎え、戦艦の建造はしばらく中止されたが、この間イギリスは、日本が長門級2隻、アメリカがメリーランド級3隻を保有することになった対応措置として、例外的に2隻の新造を認められた。

これがネルソン級2隻である。本級は40.6センチ砲を採用した唯一の英戦艦で、全主砲を前甲板に配置した思い切ったデザインは、世界の注目を集めたものである。

1936年末をもって条約時代が終ると、列強は相次いで新戦艦の建造に着手したが、英海軍も翌37年、一斉に同型5隻を起工した。こうして第2次大戦中の1940-42年に完成を見たのがキング・ジョージ5世級である。その特徴については項を改めて述べるが、いかにもジョンプル的な手堅さのなかに斬新な着想を盛り込んだ堅艦であった。

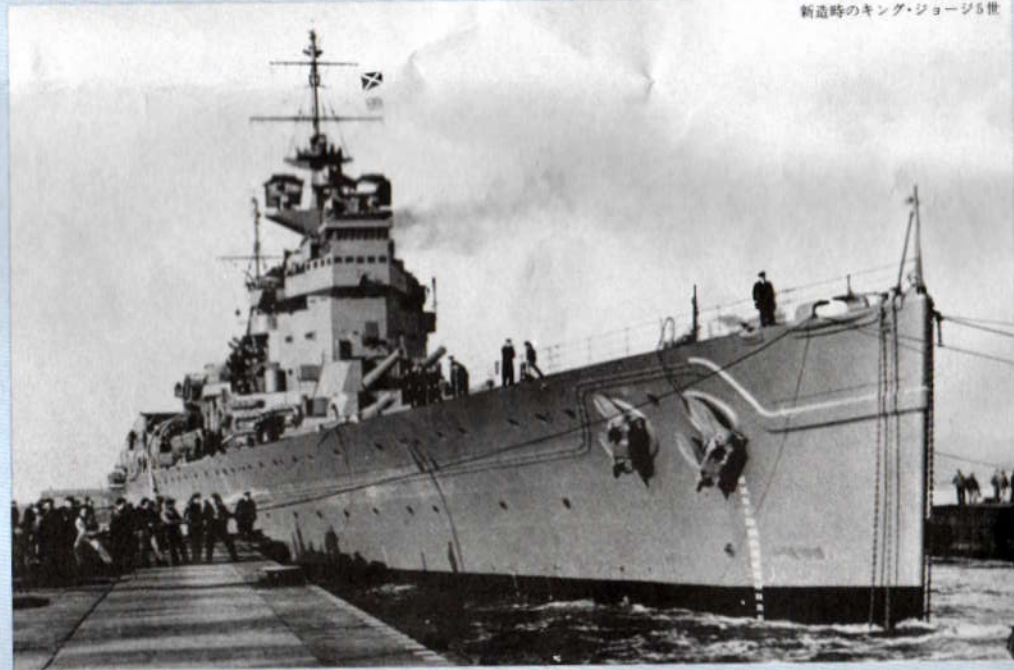
英海軍はキング・ジョージ5世級に続いて、第2次大戦中に、その改良、拡大型というべきヴァンガードの建造を開始したが、その竣工は1946年となり、大戦には間に合わなかった。これが長いイギリス戦艦史を彩る最期の戦艦であった。

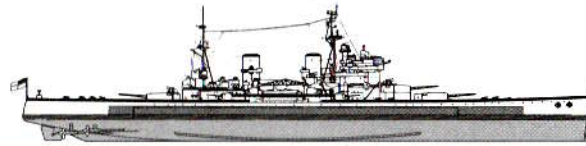
キング・ジョージ5世級の特徴

本級の要目を見て、まず第一に気付くのは、主砲に35.6センチ砲を採用していることと、それを4連装砲塔2基、連装砲塔1基として配置している点である。条約明け後に建造された列強の新戦艦中、本級が装備した35.6センチ砲はもっとも小型であり、主砲塔の形式が4連装と連装という2本立てであることも他に例がない。なぜそうなったのか。まずこの点から解明していこう。

1922年のワシントン軍縮条約、続く1930年のロ

新造時のキング・ジョージ5世





1941年8月チャーチル首相を乗せてニューファウンドランド沖に向った時のプリンス・オブ・ウェールズ



ンドン軍縮条約によって、加盟各国は1936年末まで主力艦を建造できないことになった。いわゆるネーバル・ホリデー（建艦休日）である。イギリスが建艦休日後に備えて新戦艦の設計に着手したのは1934年で、軍縮条約で課せられた制限に忠実に、基準排水量35,000トン、38.1センチ砲9門という構想で設計が進められたが、翌35年12月、第2次ロンドン軍縮会議が開かれ、1936年3月、今後建造する主力艦の備砲は35.6センチ砲を最大限とするという新条項を含む協定が批准された。これはイギリスの積極的な主張が通ったもので、日本とイタリアは会議途中で脱退してしましたが、残る英米仏3国の間で調印に達したのである。この新条項には、以後の1年間にワシントン条約署名国のいずれかが批准しなかった場合には、制限を元の40.6センチ砲にもどすという付帯条項がいていたが、ともあれ英米仏は新しい制約を自らに課することとなった。

この新条項を主張したイギリスは、当時軍事費の増大をおさえようという強い姿勢をとっており、この主張もその反映であったが、その結果、計画中の新戦艦の主砲は38.1センチ砲から35.6センチ砲に変更された。当初はこれを4連装砲塔3基に収めて、計12門搭載する方針だったが、間もなく防御力強化の必要から代償重量として主砲の削減を余儀なくされ、4連装1基を連装1基に改造して計10門に減らした。この新型35.6センチ砲は1936年6月、船体の起工に先立って発注されている。そうこうするうち、ドイツがシャルンホルスト級巡洋戦艦に続いて、いよいよ新戦艦の建造を開始した。当面のライバル、ドイツのこの動きは、英海軍を刺激し、これと均衡を保つためにも、新戦艦の工事は急がねばならなかった。

こうしてイギリスは新戦艦2隻（キング・ジョージ5世、プリンス・オブ・ウェールズ）を、条約明けの翌日、すなわち1937年の元日に起工し、引続いて同型3隻（デューク・オブ・ヨーク、アンソン、ハウ）を同年中に起工した。

第2次ロンドン軍縮条約の主力艦に関する新条項は、当時の日本の動静からみて、同年4月には御破算になる公算が大きかったが、それを待って

改めて38.1センチ砲ないし40.6センチ砲搭載艦に改変している余裕は、もうなかった。

他の新戦艦に例がない35.6センチ砲搭載艦出現の過程はあらかし以上のおりである。ちなみにアメリカも、当初新戦艦の第一陣ノース・コロライナ級を、この新条項下に設計したが、結局、日本が上記の期限までに批准を拒否したことを確認してから、40.6センチ砲搭載艦に改めている。

35.6センチの主砲は、ライバルである独新戦艦ビスマルク級、伊新戦艦リットリオ級の38.1センチ砲と比べると、破壊力においてかなり劣ることは否めない。この点については英海軍部内でもいろいろ懸念する声があったが、新たに開発したこの35.6センチ45口径砲は、極めて性能のよい砲だったといわれる。35,000トンという制約の下に造られた艦としては、本級は全体にバランスのよくとれた設計であったが、注目に値するのは副砲と高角砲をそれぞれ別個に配した従来の方式を廃止して、対空・対水上兼用の新式13.3センチ両用砲を両舷に計16門装備した点である。これは当時としては非常な卓見で、他の装備とあわせて、その対空火力は飛躍的に向上した。

防御に要した重量は排水量の3分の1以上に達し、最厚381ミリの水線装甲のほか、防御甲板装甲152ミリ、バーベット装甲406ミリで、さらに水中防御に関しても強力な隔壁と注排水装置を設けていた。

速力は計画27.5ノットであったが、実際には29ノット以上を発揮できたといわれる。主機とボイラーの配置は従来の戦艦と異なり、缶・機・缶・機のシフト配置を採用したため、防御上非常に有利になった。

艦橋構造物はすでに戦艦ウォースパイトの改造などで実績のある塔状構造を採用し、司令塔は思い切って廃止している。艦の中央部に船体を横断する固定式カタパルトを設け、1番煙突の両側に格納庫を設置して4機のウォーラス水陸両用小型飛行艇を搭載したが、戦争後期には空母機の増勢によってその必要がなくなったため、取除かれている。その後、格納庫はボートを入れたり、映画上映の際に使われたりしたという。

本級は総体的に直線部分の多い造りで、曲線で形成された優雅な美しさは見られないが、いかにもがっしりとした戦艦らしい風格を備えた姿であり、多くの軍艦ファンの愛好的になっている。

キング・ジョージ5世級の戦歴

1940年から42年にかけて逐次竣工した本級5隻の戦歴を、1番艦キング・ジョージ5世を中心に概観してみよう。

本級の活躍が最初にクローズアップされたのは1941年5月の独新戦艦ビスマルクとの砲戦である。通商破壊戦実施のため北大西洋に出撃したリュッチェンス提督指揮のビスマルクを、まず迎え撃ったのは、本級2番艦のプリンス・オブ・ウェールズと巡洋戦艦フッドであったが、この戦いはビスマルクに凱歌が上がり、フッドは轟沈、プリンス・オブ・ウェールズも大きな被害を被った。しかしプリンス・オブ・ウェールズもビスマルクに2発の命中弾を送り、その1弾は燃料タンクを破壊して、ビスマルクは油の帯を引きはじめた。長期の作戦行動を企画していたビスマルクにとって、これは由々しい事態であった。砲戦の2時間後、リュッチェンス提督は予定していた通商破壊戦を断念し、修理のため一路フランスのサン・ナゼールに向かうことを決心した。

一方、当時本国艦隊の旗艦であったキング・ジョージ5世は、巡洋戦艦レバルス、空母ヴィクトリアスなどとともに戦場に向かいつつあった。南方海域で商船護衛中の戦艦ロドネーも急速北上を命じられた。悪天候のなかで、ビスマルクを追尾していた重巡洋艦は、一時接触を失ったが、やがて飛行艇がその艦影を発見し、空母アーク・ロイヤルの雷撃機隊が2回にわたって攻撃を敢行した。この攻撃でビスマルクは魚雷2本を喫したが、その1本は艦尾に命中して操舵装置と舵を破壊し、そのためビスマルクは操艦の自由を失うにいたった。

これが結局、同艦の命取りになった。肉薄した駆逐隊の雷撃で、さらに魚雷2本が命中し、ビスマルクはフランスを基地とするドイツ機の行動圏内にあと一歩というところで、機動性を失ってしまったのである。



1941年5月 英巡洋戦艦レバルスと交戦中のビスマルク

27日の朝、キング・ジョージ5世とロドネーがようやく戦場に到着した。両艦は1万5千メートルの距離から砲撃を開始し、ビスマルクも直ちに応戦した。キング・ジョージ5世級の35.6センチ砲10門、ロドネーの40.6センチ砲9門に対するビスマルクの38.1センチ砲8門の対決である。ビスマルクの砲火は最初は精確だったが、両艦の斉射の前に急速に力を失い、次第に接近して巨砲を連打する英戦艦の前に、ついに海上の廃墟と化してしまった。それでもナチス・ドイツの誇るこの新戦艦はなお容易に沈む気配を示さず、最後は重巡ドーセットシャーの雷撃によって止めを刺したのである。

この砲戦で、キング・ジョージ5世は主砲のほかに副砲も動員し、ロドネーは最後に2700メートルまで近づいて40.6センチ砲の直射を行なっている。ビスマルクとの戦いで傷ついたプリンス・オブ・ウェールズは、損傷箇所を修理後、チャーチル首相を乗せて大西洋を横断し、ニューファウンドランド沖で、米ルーズヴェルト大統領との有名な洋上会議の舞台になった。

この会議の結果生まれたのが、大戦中および戦後の世界の指導原則を明らかにした大西洋憲章である。しかし同艦の余命はもういくばくもなかった。ほどなくチャーチルの強い意向で、日本の南進を牽制するため極東に派遣されたプリンス・オブ・ウェールズは、12月10日のマレー沖海戦で、わが陸隊の雷撃を受け、巡洋戦艦レバルスとともにマレー沖の藻屑と化したのである。

航空機の攻撃で新戦艦を失ったショックは大きかった。プリンス・オブ・ウェールズ沈没の前月に3番艦デューク・オブ・ヨークが竣工し、翌年の夏には4番艦アンソン、5番艦ハウが相次いで就役したが、このクラスが再び極東に姿を現わすのは、大戦末期になってからである。

その後のキング・ジョージ5世は、ノルウェーのフィヨルドに潜むドイツ船団を攻撃したり、ソ連向けの船団護衛に従事したりしたが、1942年5月1日、思いがけない事故で損傷を蒙った。折から同艦は米戦艦ワシントンとともにPQ15船団を護衛中であつたが、濃い霧のなかで駆逐艦パンジ

KING GEORGE V

解説「世界の艦船」編集長 石渡幸二 写真「世界の艦船」



ヤビと衝突し、パンジャビは二つに折れて沈み、キング・ジョージ5世は艦首に10メートル以上の大きな亀裂を生じた。被害はそれだけではなかった。パンジャビが搭載していた爆雷が同艦とワシントンとの間の海中で一斉に爆発し、そのすさまじいショックで電気装置やターボ発電機などに大きな支障を生じたのである。

1943年12月には、デューク・オブ・ヨークが、ノルウェーの北岬沖で、船団攻撃に出撃してきた独巡洋戦艦シャルンホルストを捕獲し、嵐の海の追撃戦でこれを撃沈するという戦果をあげた。

1944年に入るとヨーロッパの戦局は決定的に連合国側に有利になり、船団に挑戦する水上艦、航空機の脅威も薄らいだので、インド洋方面への艦隊の増強が開始された。同年11月22日には、セイロンを基地として英太平洋艦隊が新設され、司令長官にフレーザー大将が着任した。年末までに、その傘下にかんりの艦艇が集められ、戦艦は本級2隻（キング・ジョージ5世と5番艦ハウ）が編入されて、ハウが艦隊旗艦となった。

1945年1月16日、トリンコマリを出撃した英艦隊は24日バレンバンを空襲し、精油施設にかなりの被害を与えたが、この時はキング・ジョージ5世が行動をともにしている。同艦は2月にオーストラリアのフリーマントルに入港し、新たに太平洋艦隊次席指揮官に任命されたローリングス中將の旗艦となった。

3月から始まった沖繩作戦では、英太平洋艦隊も第57任務部隊として連合軍の一翼を担っていた。日本軍の特攻によって、英空母も相次いで被害を受けたが、戦艦陣は無事であった。激しい空からの攻撃下に、空母の直衛として行動するには、それなりの高速が必要であり、それに適した英戦艦は本級以外になかった点に注目する必要がある。

5月4日、第57任務部隊は宮古島に接近し、キング・ジョージ5世とハウは45分間にわたって飛行場を砲撃した。この時は主砲だけでなく13.3センチ両用砲も使用している。

オブ・ヨークと4番艦アンソン）も太平洋艦隊に増派されることになり、同月25日スカパフローを出港して、7月上旬シドニーに入港した。

6月、ハウは修理のためダーバンへ向かったが、キング・ジョージ5世はそのまま留まって、7月17日の夜、米戦艦と協力して日立を艦砲射撃した。砲撃は、23時15分から14マイルの距離で開始され、0時10分まで続いた。同艦は35.6センチ砲を270発発射している。7月29日夜、再びキング・ジョージ5世は米艦隊とともに日本本土の艦砲射撃を行った。今度の目標は航空機のプロペラを製造している浜松の日本兵器である。23時19分から約40分間の砲撃で発射された主砲弾は265発であったが、この日の命中率は悪く、目標を直撃したのはたった7発であったという。この砲撃が英戦艦が大戦中主砲を敵に向かって打った最後の機会となった。

7月に回航されたデューク・オブ・ヨークとアンソンは、対日戦に参加する機会を得ないうちに戦争の終結を迎え、終戦直後に東京湾に姿を見ている。

筆者は終戦の翌月、奇麗に塗装して横浜港外に錨を下ろしたアンソンの姿を、横浜から本更津に通う東京湾汽船の月丸から、ちかちかと眺める機会を持ったが、その威風堂々たる艦容に、賛嘆と嫉視の入りまじった複雑な気持ちをいだいたことを忘れない。

結局、大戦末期に本級が太平洋に姿を現わしたとき、崩壊寸前の日本はすでにこれに痛打を与えるだけの力がなく、4隻は無事本国に帰還しているが、いずれもその余命は長くなかった。第2次大戦の過程で、航空機の威力の前に艦隊主力としての地位を失った戦艦は、相次いで引退、解体の運命をたどり、本級もまた1949年から51年の間に予備役に編入され、57年間に逐次解体業者の手に引渡されて、その姿を消していった。

ただ日本の大和、武蔵と違って、戦争中に限ってみても、すばらしい写真が沢山残されている点だけは、何ともしようもないことである。

イギリス海軍主力艦の歴史

（1906年～1946年）

（ ）内は竣工時の年代

スケール1/3500



戦艦
ドレッドノート
(1906年)



戦艦
ベレロフォン級
(1909年)



戦艦
セント・ヴィンセント級
(1909年)



戦艦
マーズ級
(1911年)



戦艦
コンスタンス級
(1911年)



戦艦
オリオン級
(1912年)



戦艦
キング・ジョージ5世級(初代)
(1912年)



戦艦
アイアン・デューク級
(1914年)



戦艦
クイーン・エリザベス
(1915年)



戦艦
ヴァンガード
(1946年)



戦艦
ロイヤル・ソブリン級
(1916年)



巡洋戦艦
インフレキシブル級
(1908年)



巡洋戦艦
インデフィニティブ級
(1911年)



巡洋戦艦
ライオン級
(1912年)



巡洋戦艦
タイガー
(1914年)



巡洋戦艦
リナウド級
(1916年)



巡洋戦艦
トラファルガー
(1920年)



戦艦
ネルソン級
(1927年)



戦艦
キング・ジョージ5世級
(1940年)



戦艦
ヴァンガード
(1946年)



作る前に必ず
お読み下さい。

〈作る前にお読み下さい〉

★お買い求めの際、または組み立ての前には必ず内容をお確かめ下さい。万一不良部品、不足部品などありました場合には、お買い求めの販売店にご相談下さい。なお組み立てを始めた後は、製品の返品、交換などに応じかねます。

★タミヤからはピン入りの接着剤タミヤセメントが別売されています。モデルをきれいに仕上げるタミヤセメントをお使い下さい。

★組み立てに入る前に説明図を最後までよく見て、全体の流れをつかんで下さい。

★ニッパー、ピンセット、ナイフ、ペンバイス、セロファンテープ等の工具を用意して下さい。

★図中青く印刷されているところは接着箇所です。両面につけしっかりと接着して下さい。

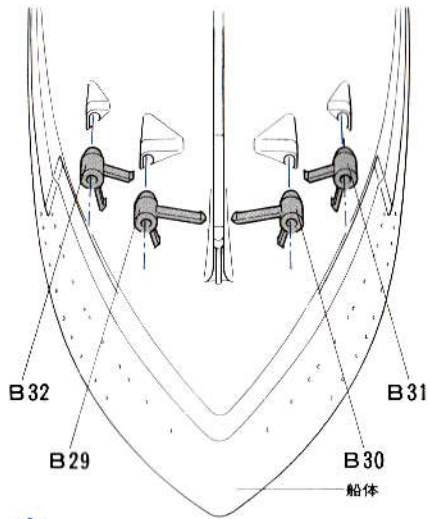
これは塗装指示のマークです。
全体の塗装はP18を見て下さい。
塗装指示の色名はすべてタミヤカラーエナメル塗料、タミヤカラーアクリル塗料の色名になっています。

〈部品を切りはなす〉

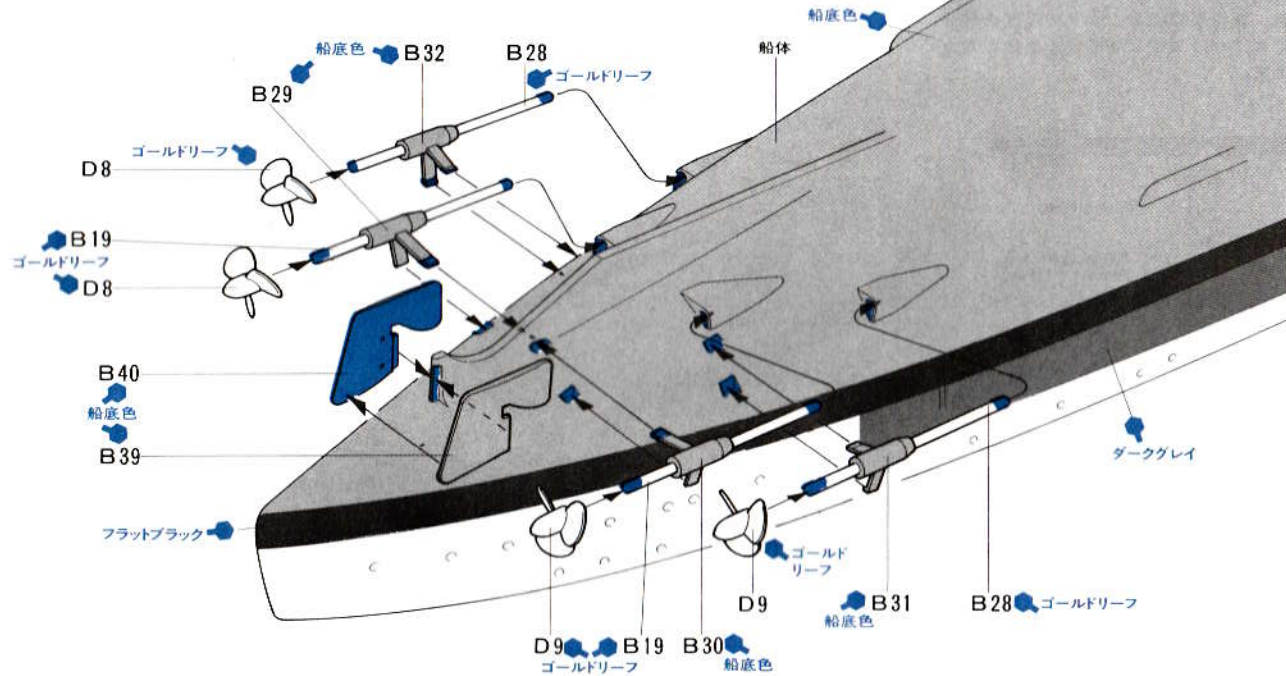
部品をランナーから切りはなすときは、ニッパーやナイフできりとり、切り口のよぶんな部分もていねいにとりぞいて下さい。

1 スクリューのとりつけ

〈B29～32のとりつけ〉

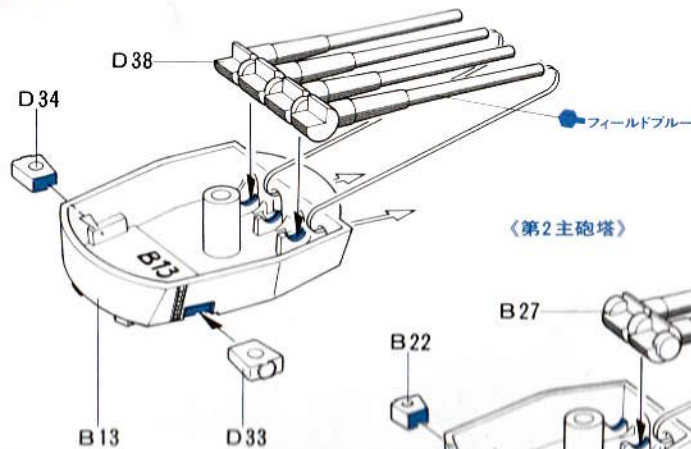


図中塗装指示のない部分は船体色です。P18の塗装ページを参考にして下さい。

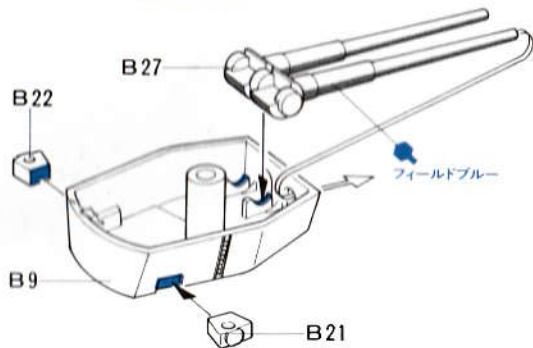


2 14インチ(35.6cm)主砲塔のくみ立て

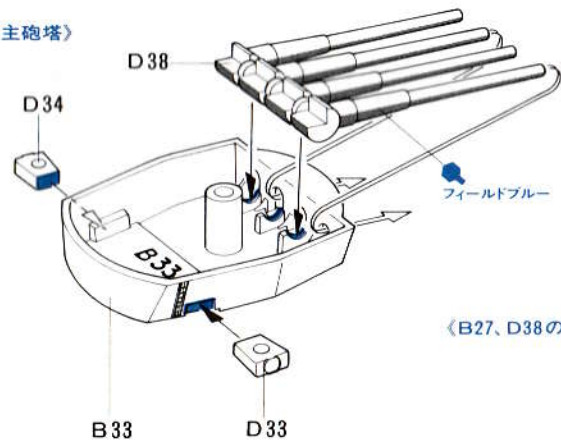
〈第1主砲塔〉



〈第2主砲塔〉

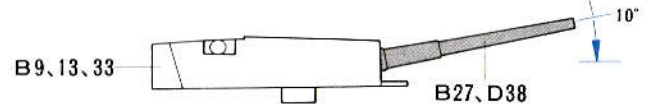


〈第3主砲塔〉



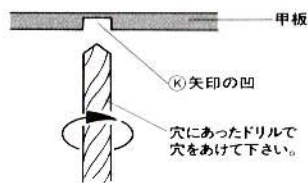
〈B27、D38のとりつけ〉

図の範囲内でB27、D38をとりつけることができます。平常時は10°前後の位置にとりつけて下さい。



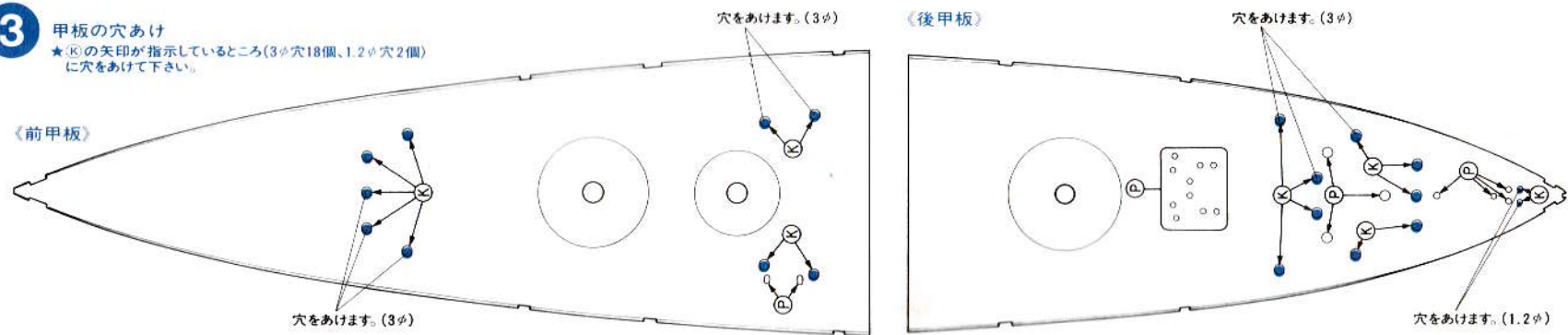
3 甲板の穴あけ

前、後甲板は裏側から㊸の矢印の部分にピンバイスやキリで穴をあけておきます。



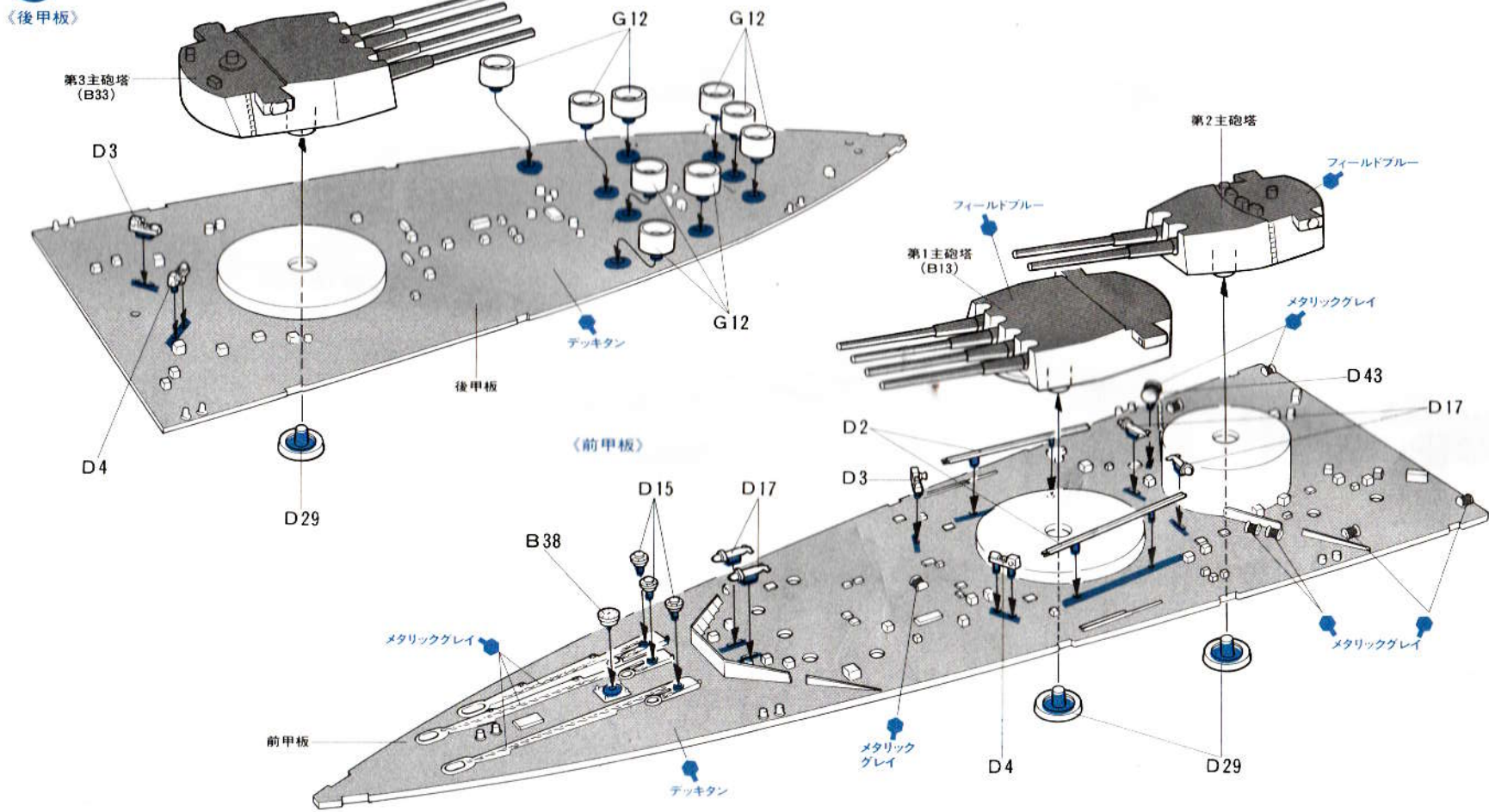
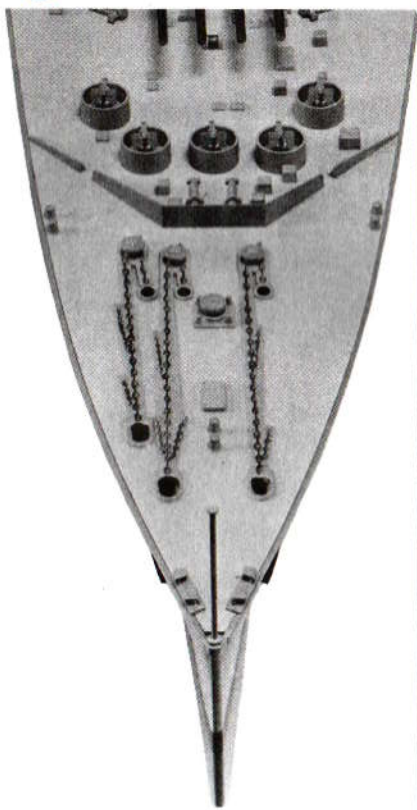
3 甲板の穴あけ

★㊸の矢印が指示しているところ(3φ穴18個、1.2φ穴2個)に穴をあけて下さい。



4 甲板のくみため

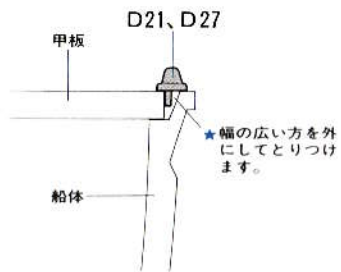
甲板のくみため



TAMIYA CEMENT 40ml
 タミヤセメント(ピン入り)
 プラスチックモデル用液体接着剤。安定性のいい使い易い四角いピン入り、容量もお徳用です。

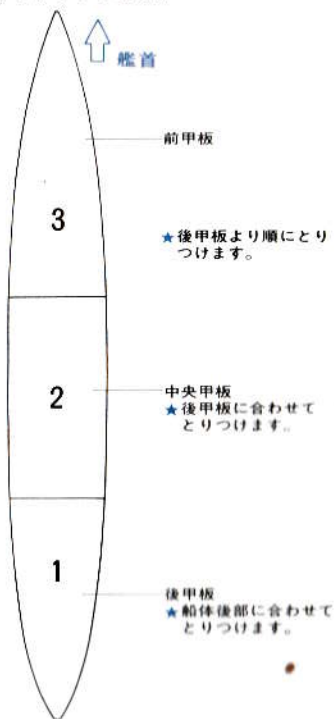
5 (後甲板のとりつけ)

(D21、D27のとりつけ)



(甲板のとりつけ)

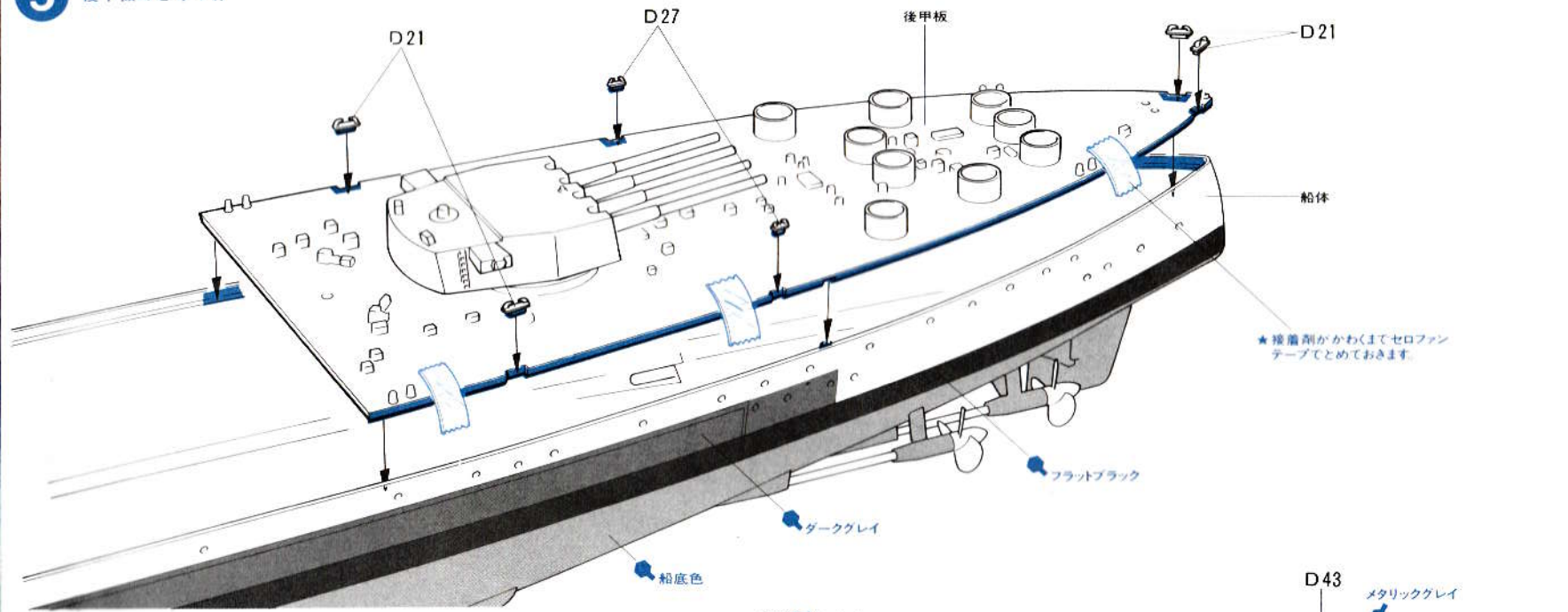
甲板は後甲板、中央甲板、前甲板の順でとりつけていきます。



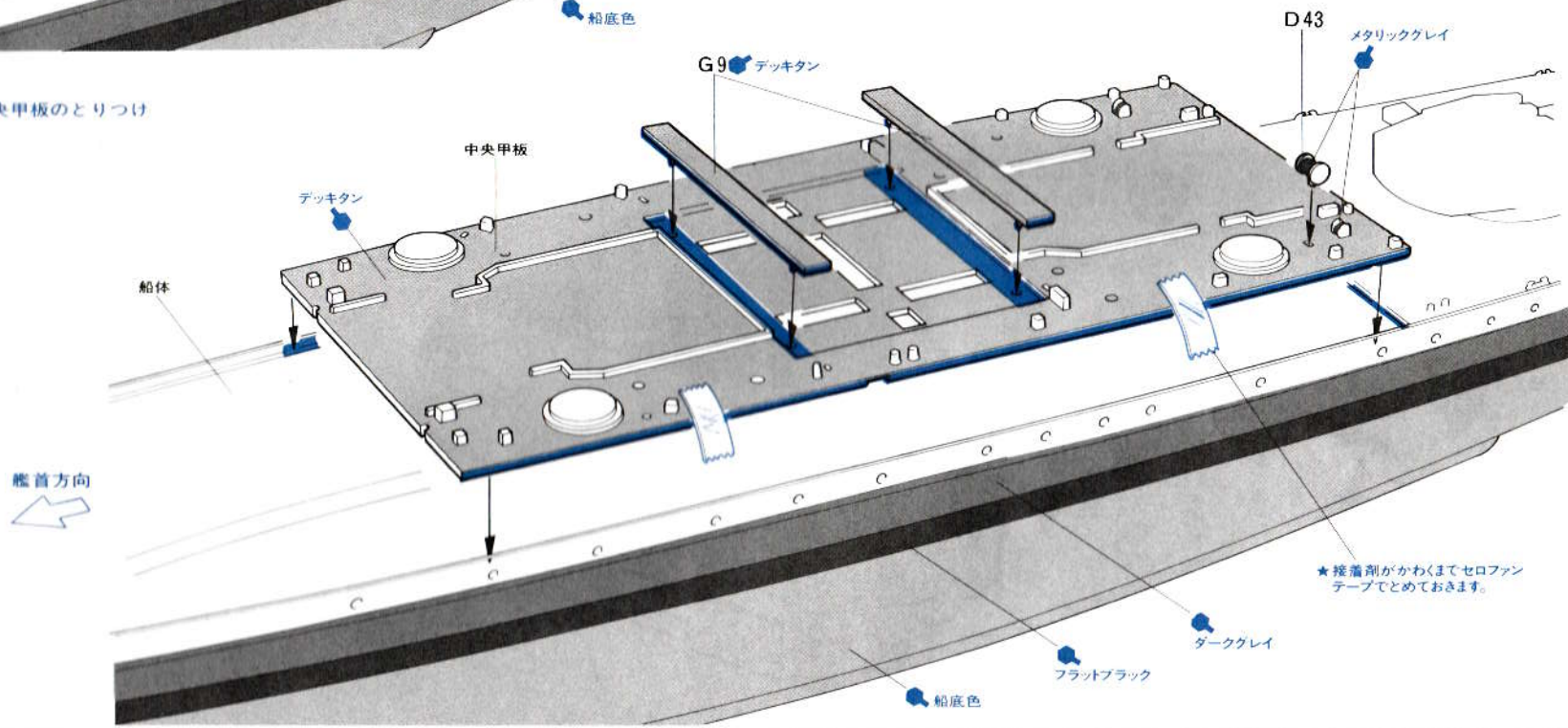
タミヤニュースを読む

タミヤニュースはモデル作りの情報誌として多くの方に愛読されています。ご希望の方は模型店でおたずね下さい。当社より定期購読する方法もあります。

5 後甲板のとりつけ

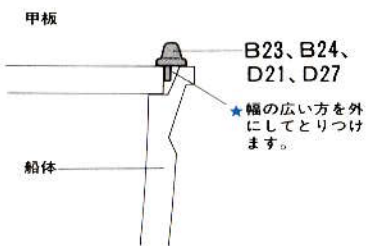


6 中央甲板のとりつけ



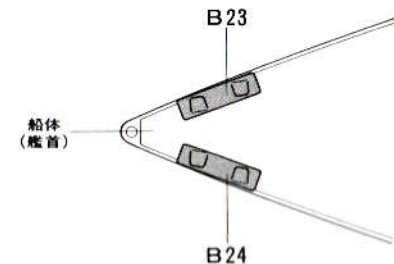
7 《前甲板のとりつけ》

《B23、B24、D21、D27のとりつけ》



《B23、B24のとりつけ》

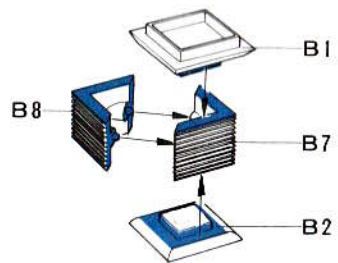
向きをまちがえないようにとりつけます。



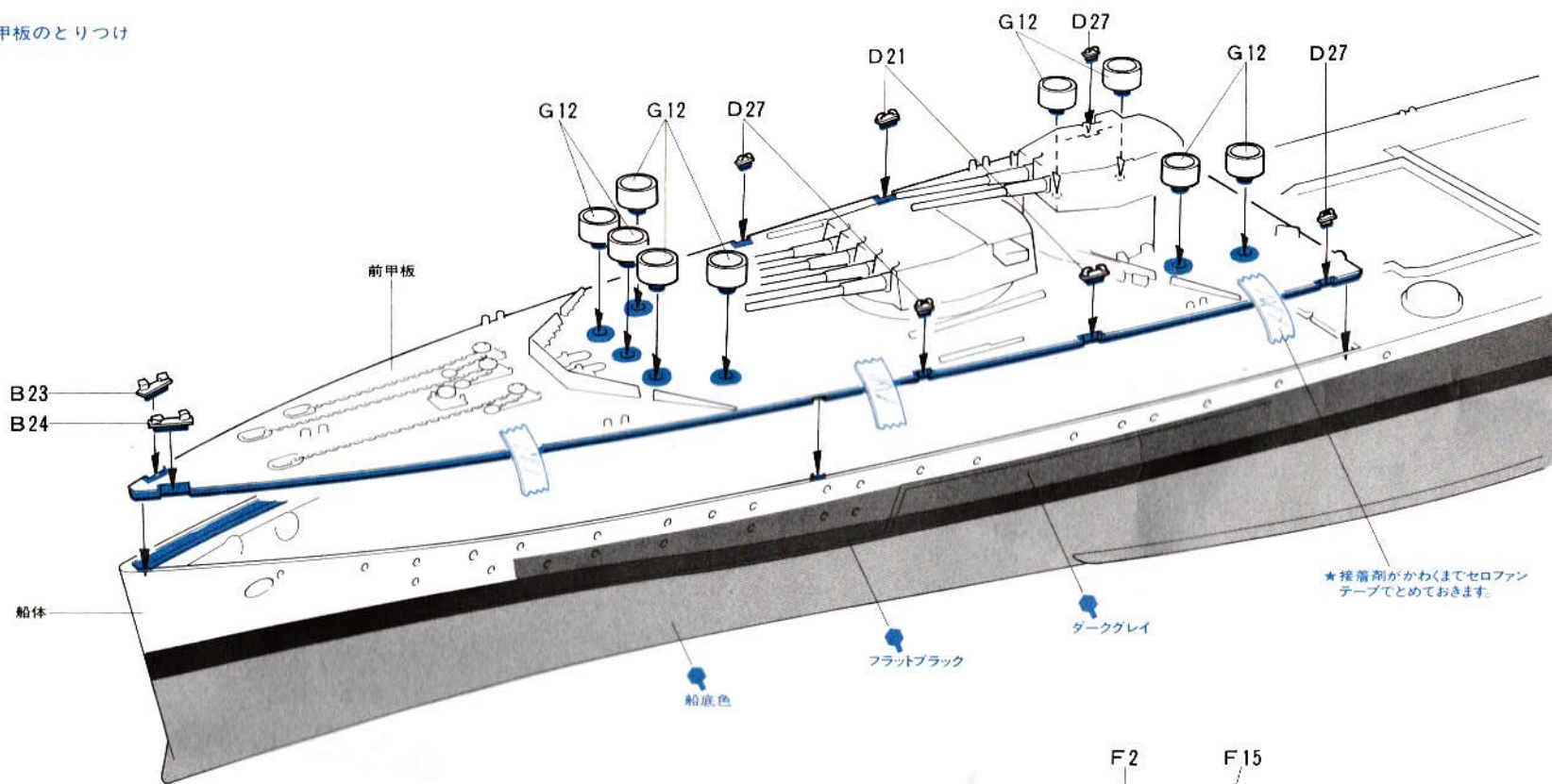
8 《後部シェルター甲板のくみだて》

《後部ボイラー室通風孔のくみだて》

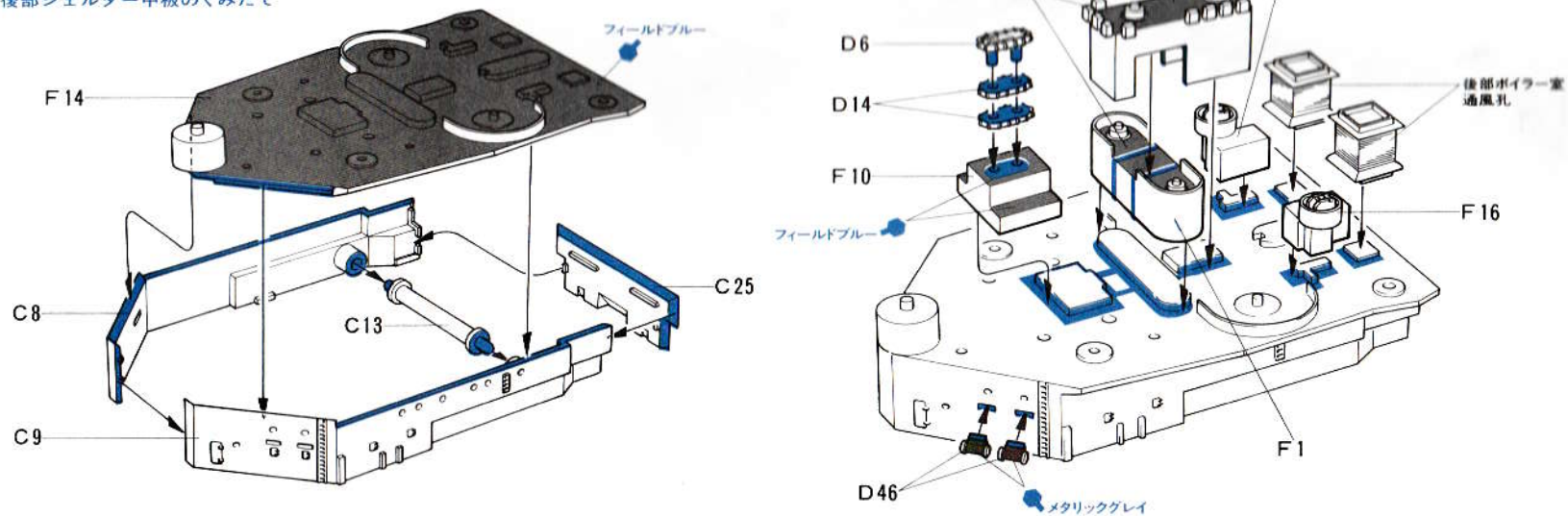
★2個作ります。



7 前甲板のとりつけ



8 後部シェルター甲板のくみだて

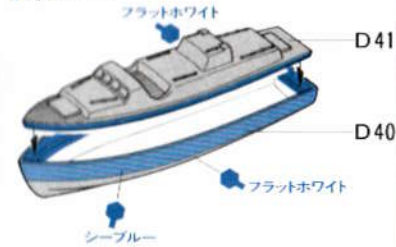


10 〈ボート甲板のくみため〉

〈ボートのくみたと塗装〉

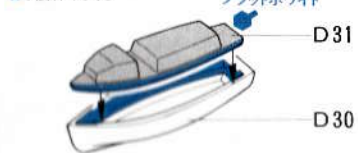
45フィート哨戒艇

★2個作ります。



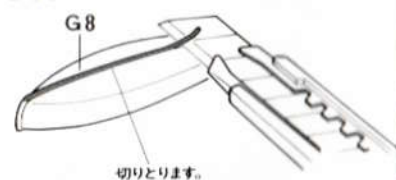
25フィートファーストモーターボート

★3個作ります。



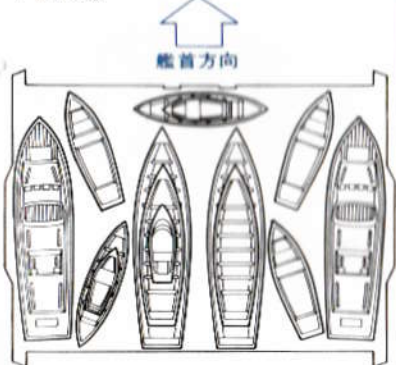
〈キールの切りとり〉

G 8 (32フィートカッター)は下図のようにキール部分を切りとってとりつけます。



〈ボートの配置〉

各ボート類は下図のようにボート甲板 (F6) よりはみださないようにとりつけて下さい。

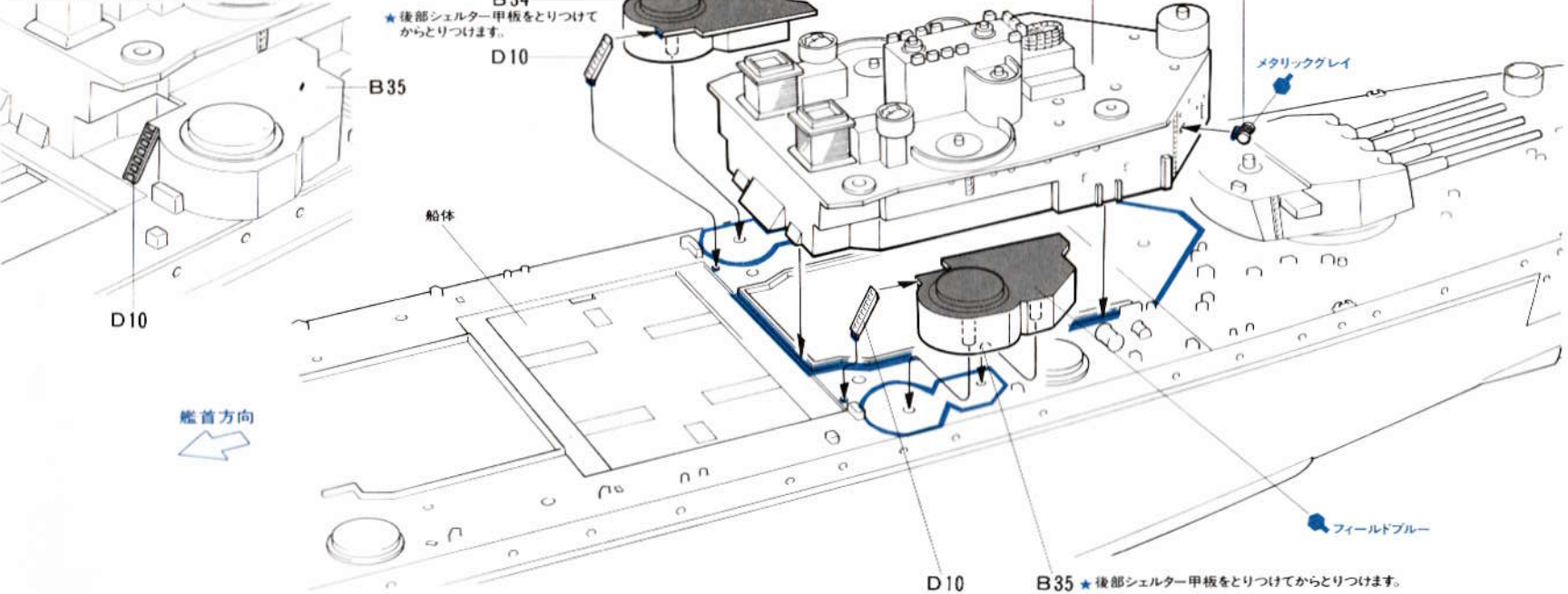


9 後部シェルター甲板のとりつけ

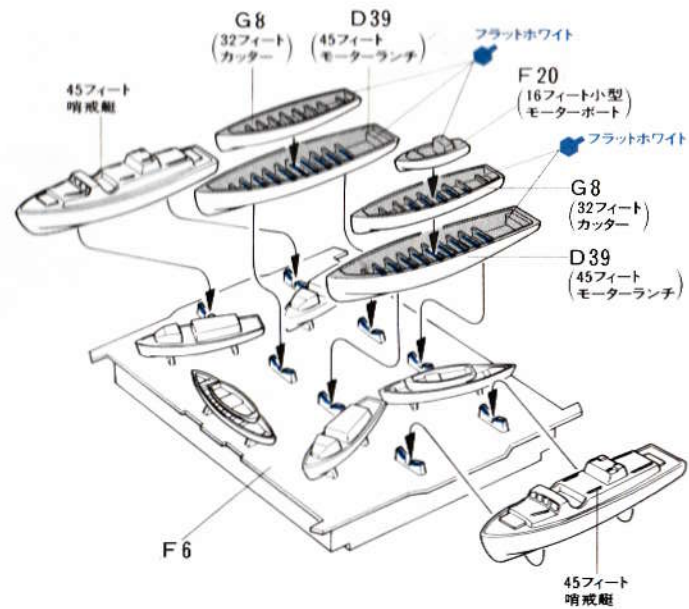
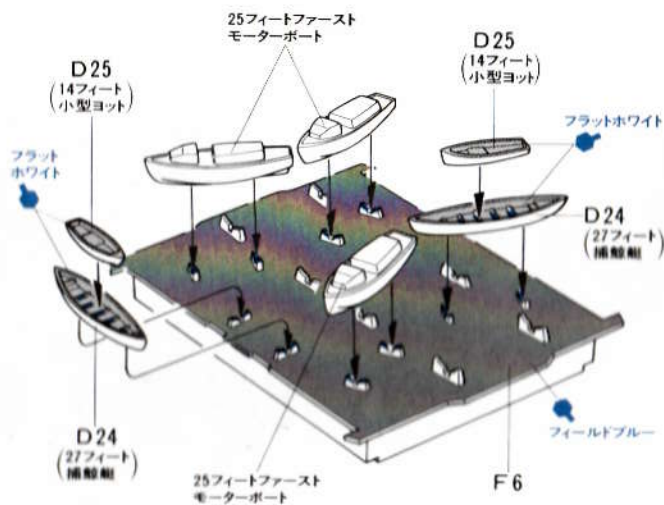
★後部シェルター甲板をとりつけてからB34、B35をとりつけます。

〈D10のとりつけ〉

甲板とB34、35の両方にとりつけるようにします。



10 ボート甲板のくみため

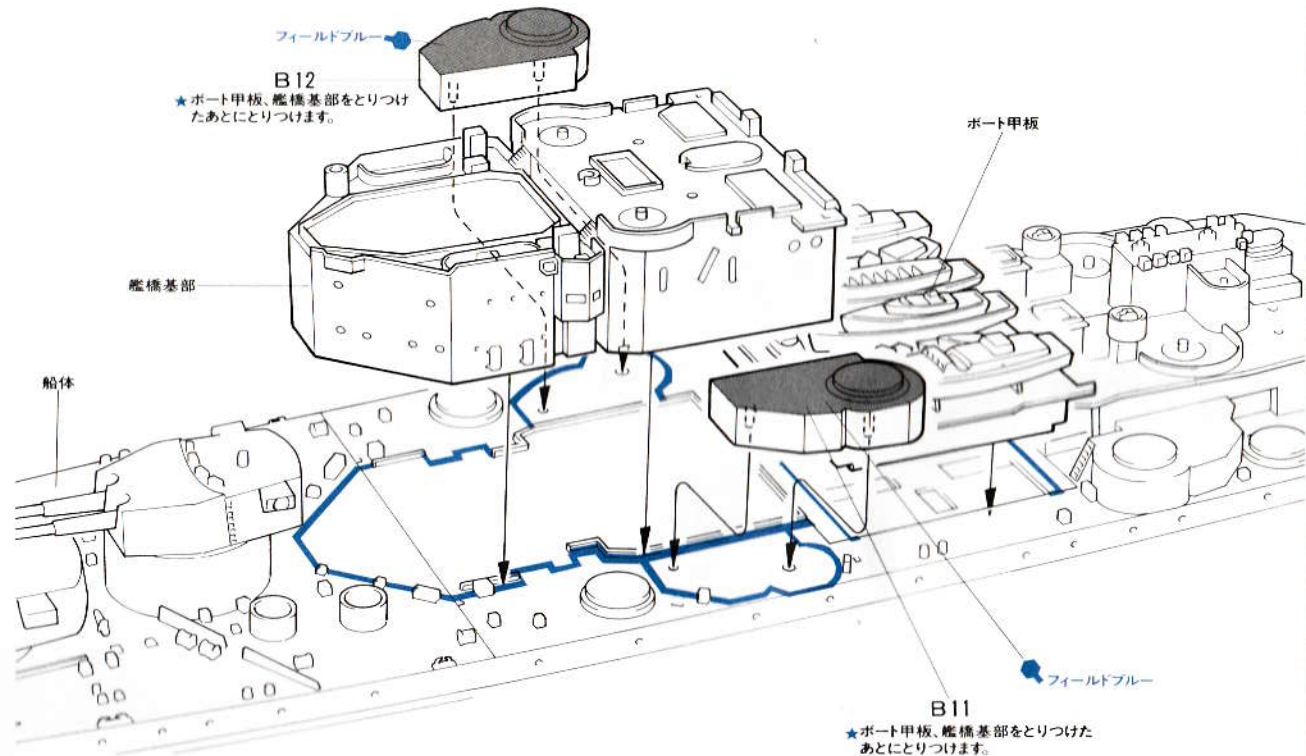
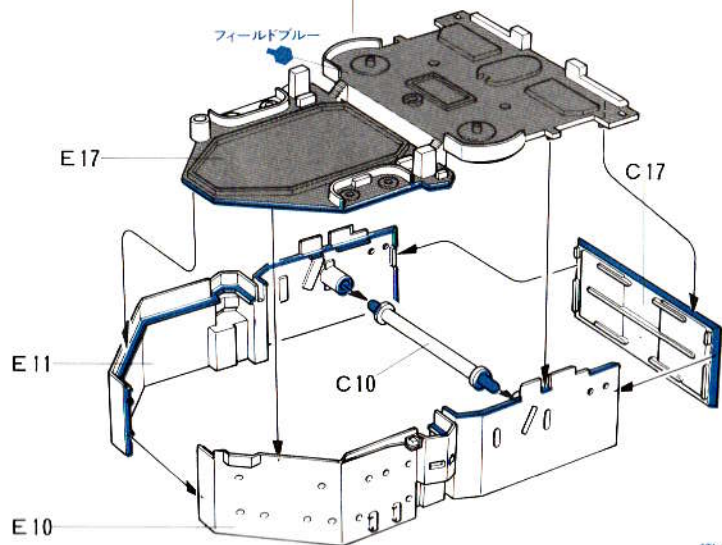


11 艦橋基部のとりつけ

〈艦橋基部のくみたち〉

11 艦橋基部のとりつけ

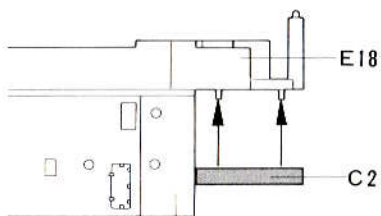
★ポード甲板、艦橋基部、B11、12の順番で船体にとりつけて下さい。



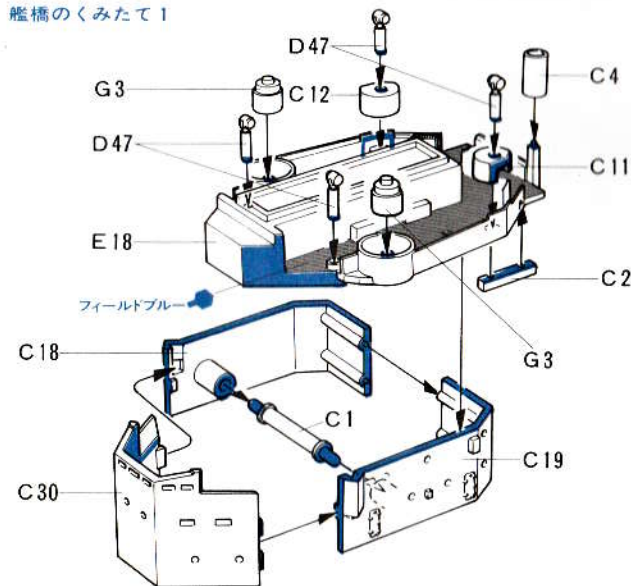
12 艦橋のくみたち1

〈C2のとりつけ〉

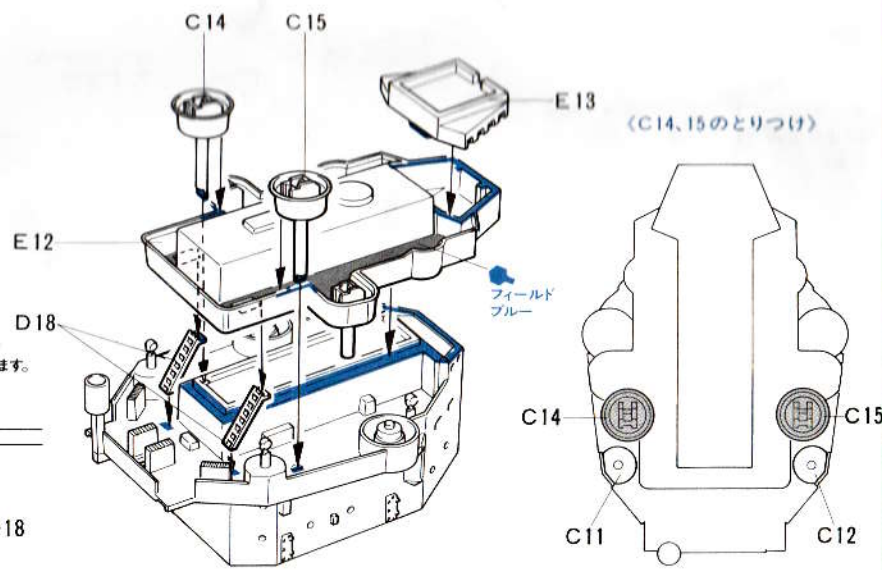
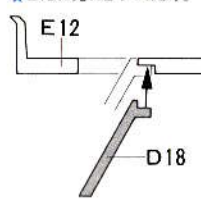
12 艦橋のくみたち1



(組み立てたC1、C18、C19、C30)



〈D18のとりつけ〉
★E12に先にとりつけます。



TAMIYA COLOR

タミヤカラー(アクリル塗料)

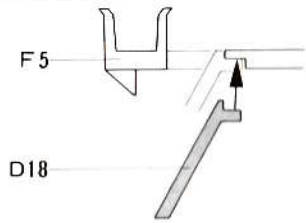


塗りやすい水溶性塗料です。安全性が高く筆は水洗いもできます。木や金属、発泡スチロールなど広く使え、スプレー塗装もOK。

13 《艦橋のくみため2》

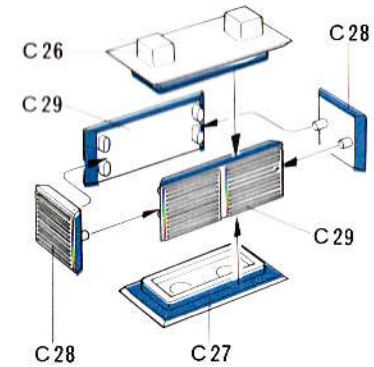
《D18のとりつけ》

★F5に先にとりつけます。

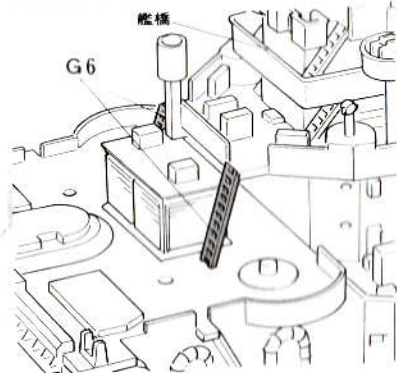


14 《艦橋のとりつけ》

《前部ボイラー室通風孔のくみため》



《G6のとりつけ》

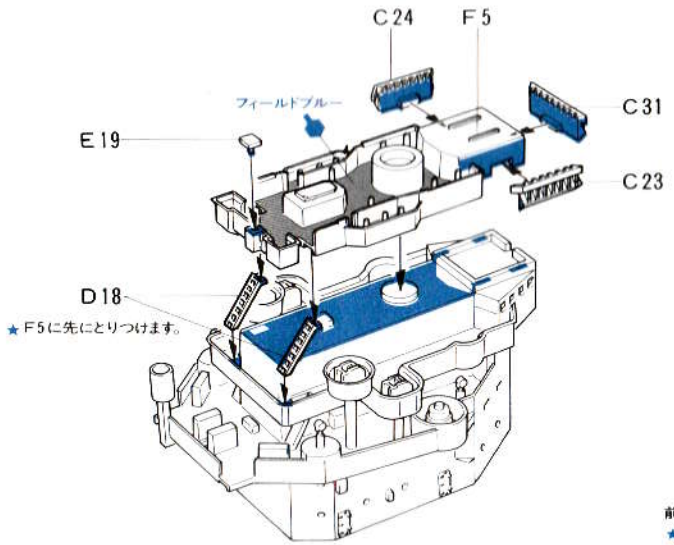


TAMIYA COLOR
タミヤカラー(エナメル塗料)

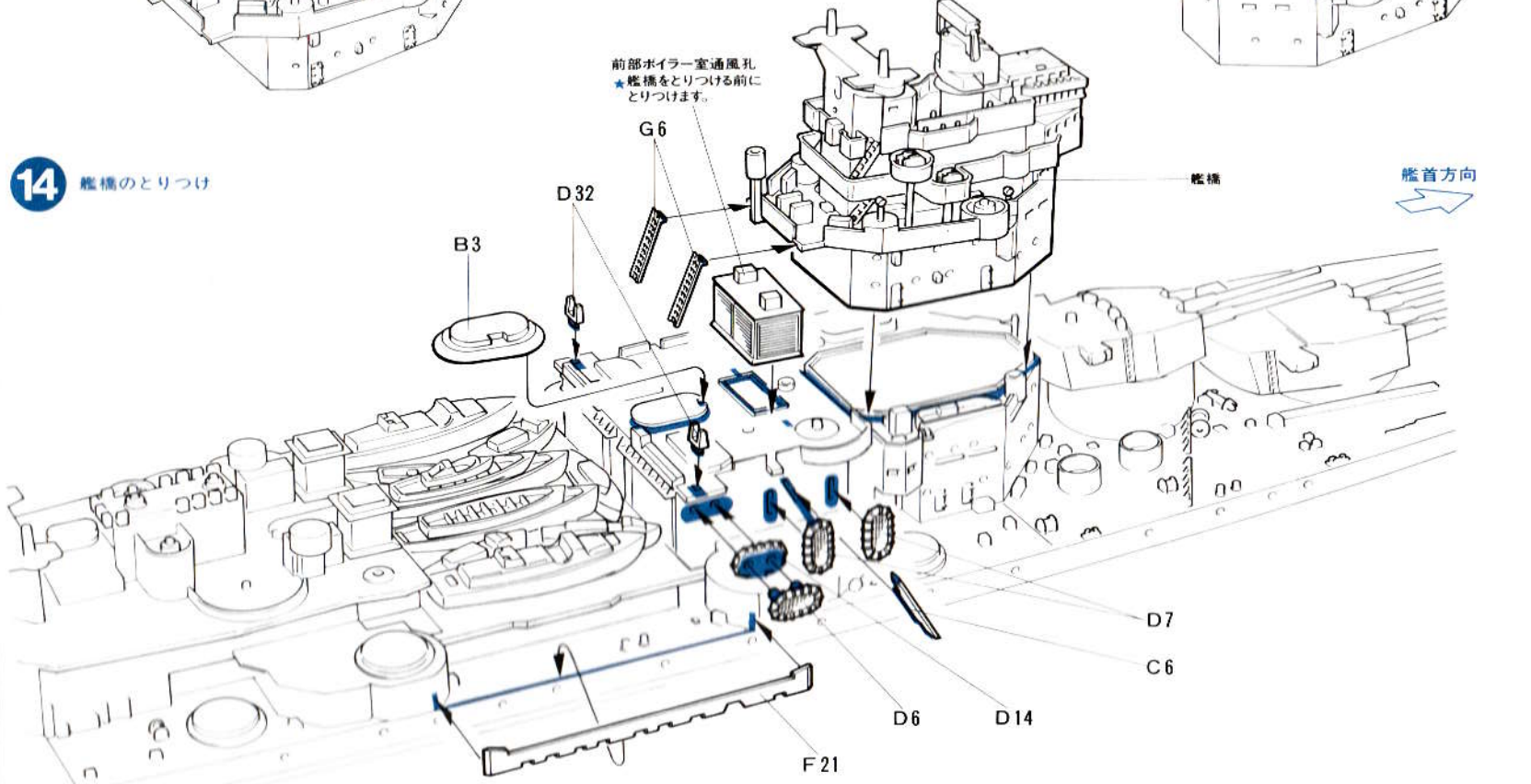
筆塗り塗装にぴったり。のびが良く筆ムラ、泡立ちもほとんどなし。つやの良さもエナメル塗料ならではの、もちろんスプレー塗装もOK。



13 艦橋のくみため2

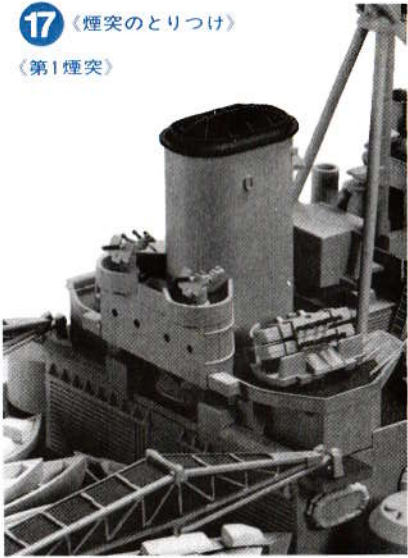


14 艦橋のとりつけ

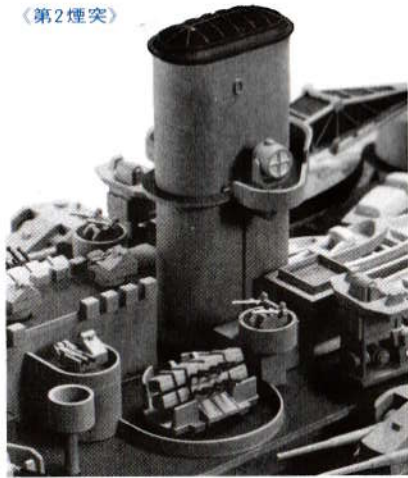


17 《煙突のとりつけ》

《第1煙突》



《第2煙突》

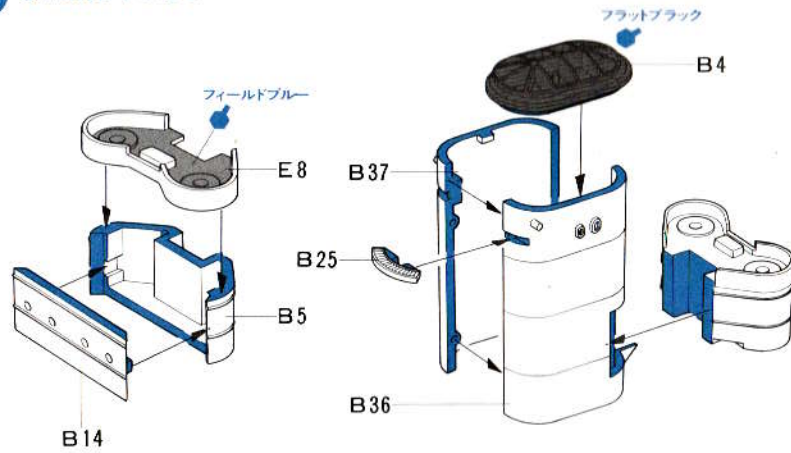


軍艦雑記帳・上巻 軍艦雑記帳・下巻

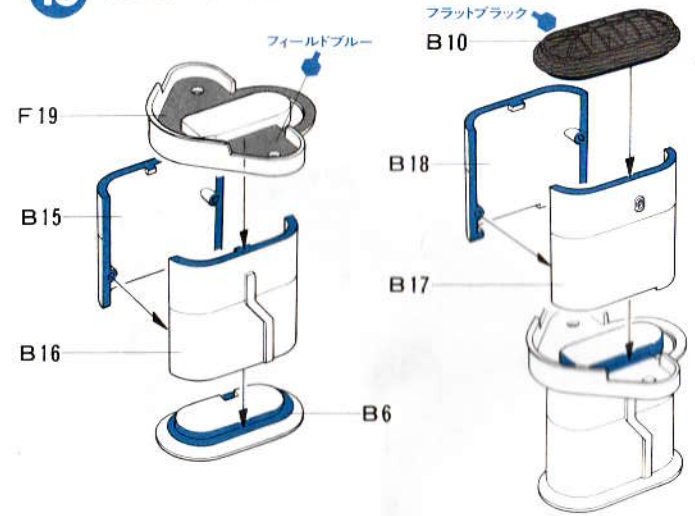


日本軍艦の構造を多数の図とあわせてくわしく解説。
上巻では艦橋や火砲、魚雷など、下巻では船体や甲板、艦載艇など、それぞれ8章で構成。軍艦模型作りの貴重な資料です。お求めはお近くの模型店で、または当社アフターサービスへお問合せ下さい。

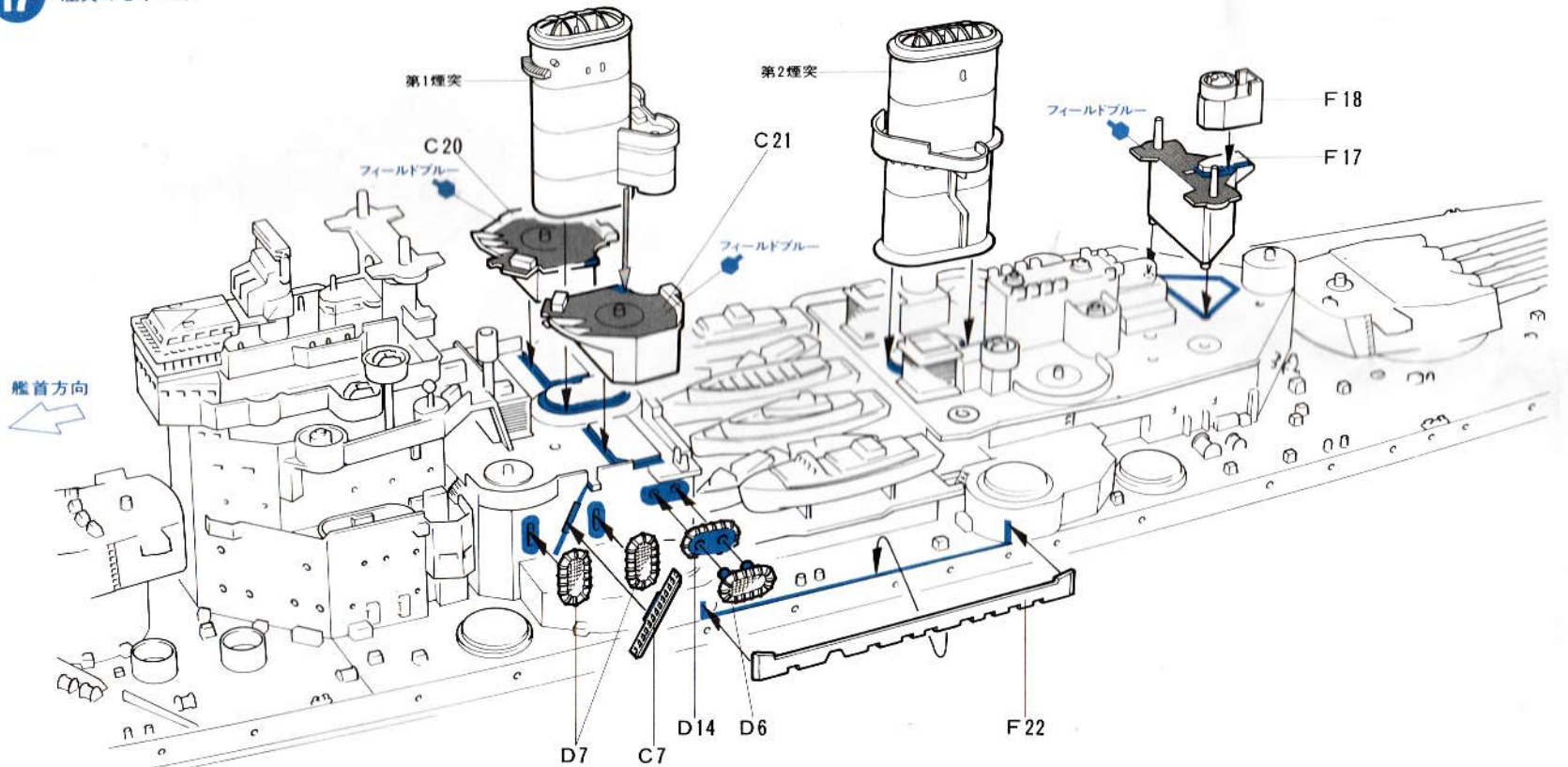
15 第1煙突のくみため



16 第2煙突のくみため

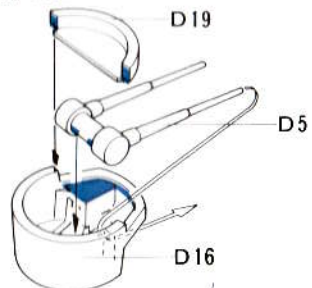


17 煙突のとりつけ

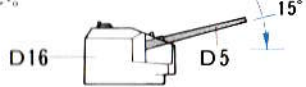


18 (5.25インチ(13.3cm)連装両用砲塔)のとりつけ

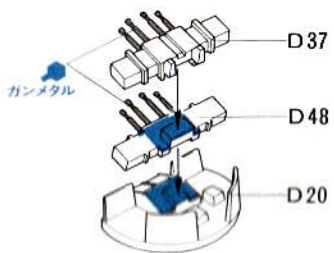
〈5.25インチ連装両用砲塔のくみため〉
★8個作ります。



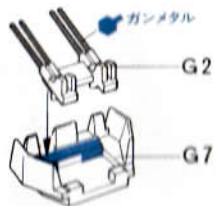
D5は図の範囲内でとりつけることができます。平常時は図の位置(15°)でとりつけて下さい。



〈2ポンド8連装ボンボン砲〉
★8個作ります。



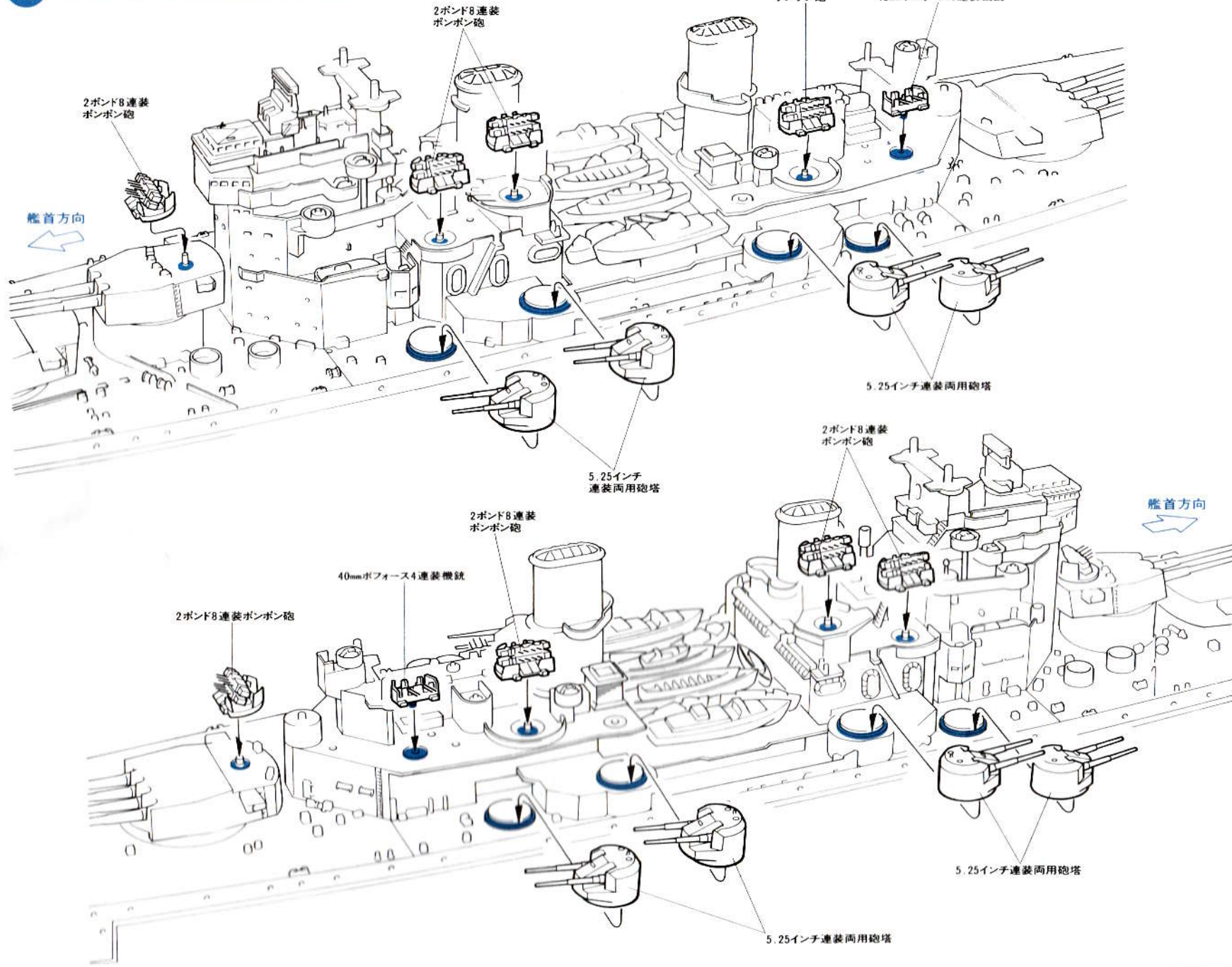
〈40mmボフォース4連装機銃のくみため〉
★2個作ります。



★右図を参考にくみためます。



18 5.25インチ(13.3cm)連装両用砲塔のとりつけ



19 《20mm単装機銃のとりつけ》

《20mm単装機銃のくみため》

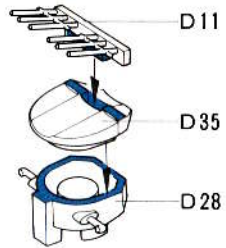
★12個作ります。



★表裏に注意して下さい。

《5.25インチ砲方位盤指揮所のくみため》

★4個作ります。

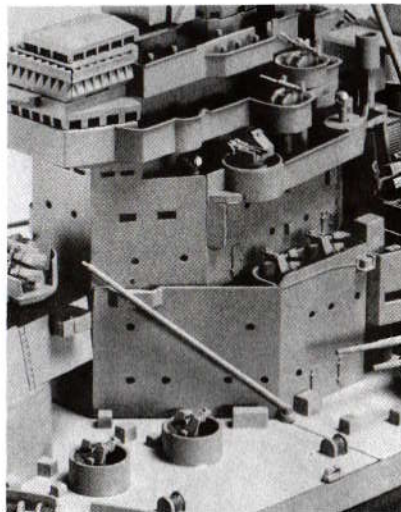


《探照灯のくみため》

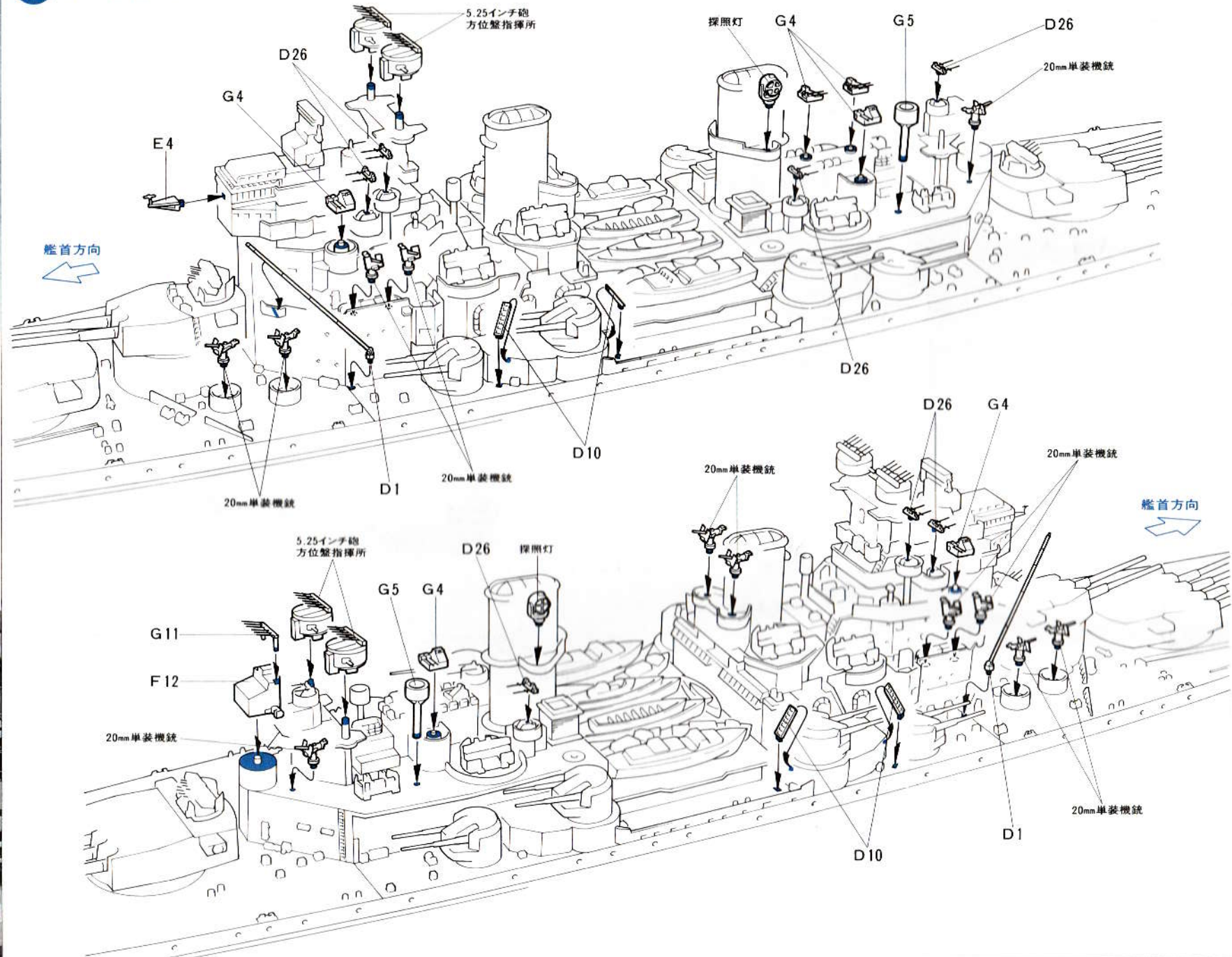
★2個作ります。



《D1のとりつけ》



19 20mm単装機銃のとりつけ



20 《艦首部品のとりつけ》

《アンカー(D36)のとりつけ》

《右舷》

D36



《艦首》

《艦尾》

20 艦首部品のとりつけ

《20mm単装機銃のくみため》

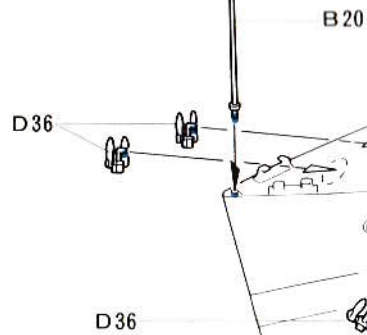
★5個作ります。

ガンメタル



G10 G1

★表裏に注意して下さい。



21 艦尾部品のとりつけ

《20mm単装機銃のくみため》

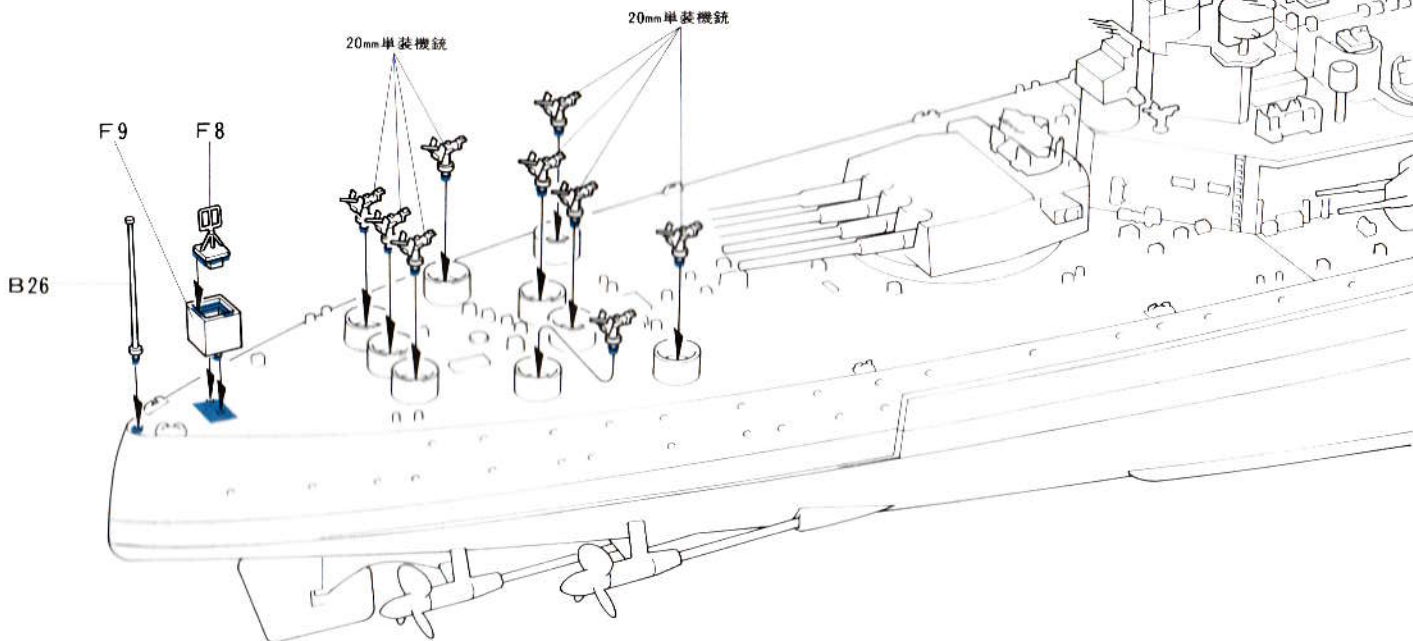
★9個作ります。

ガンメタル



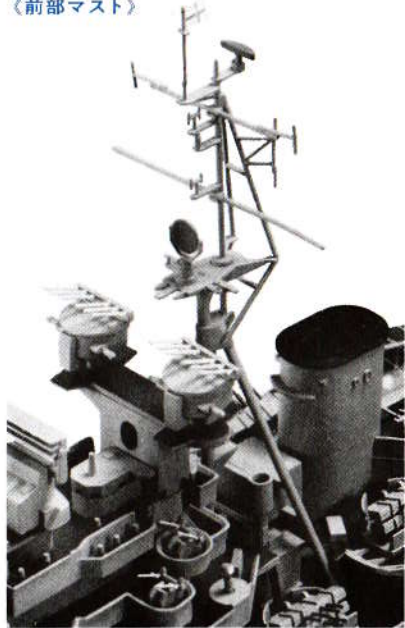
G10 G1

★表裏に注意して下さい。



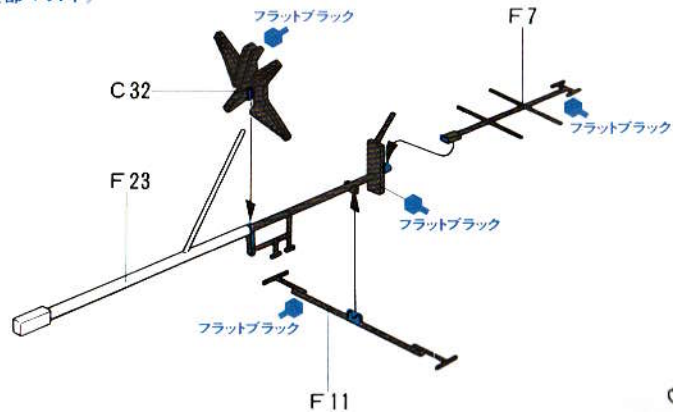
22 《マストのくみため》

《前部マスト》

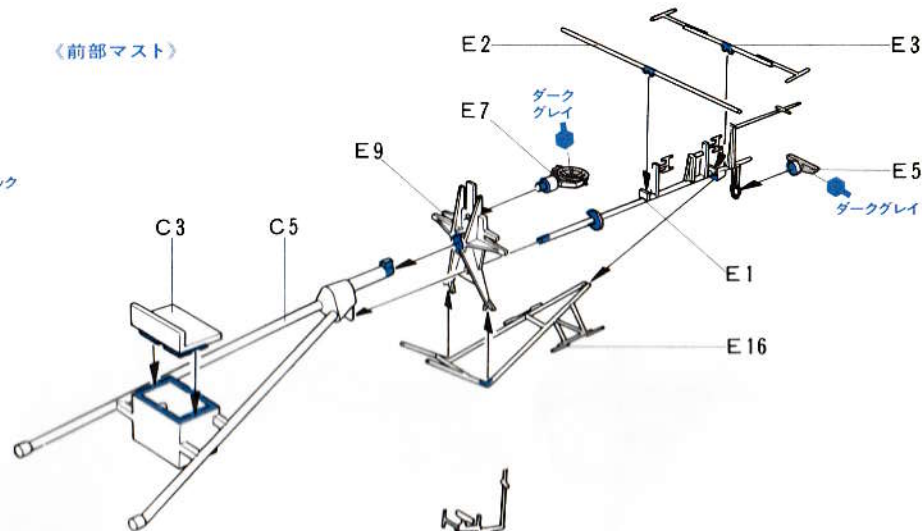


22 マストのくみため

《後部マスト》



《前部マスト》

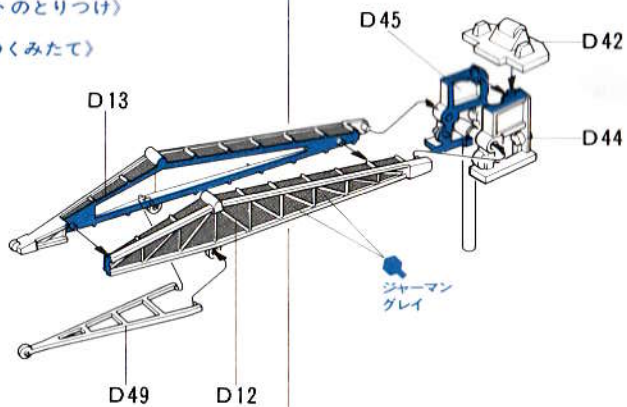


23 マストのとりつけ

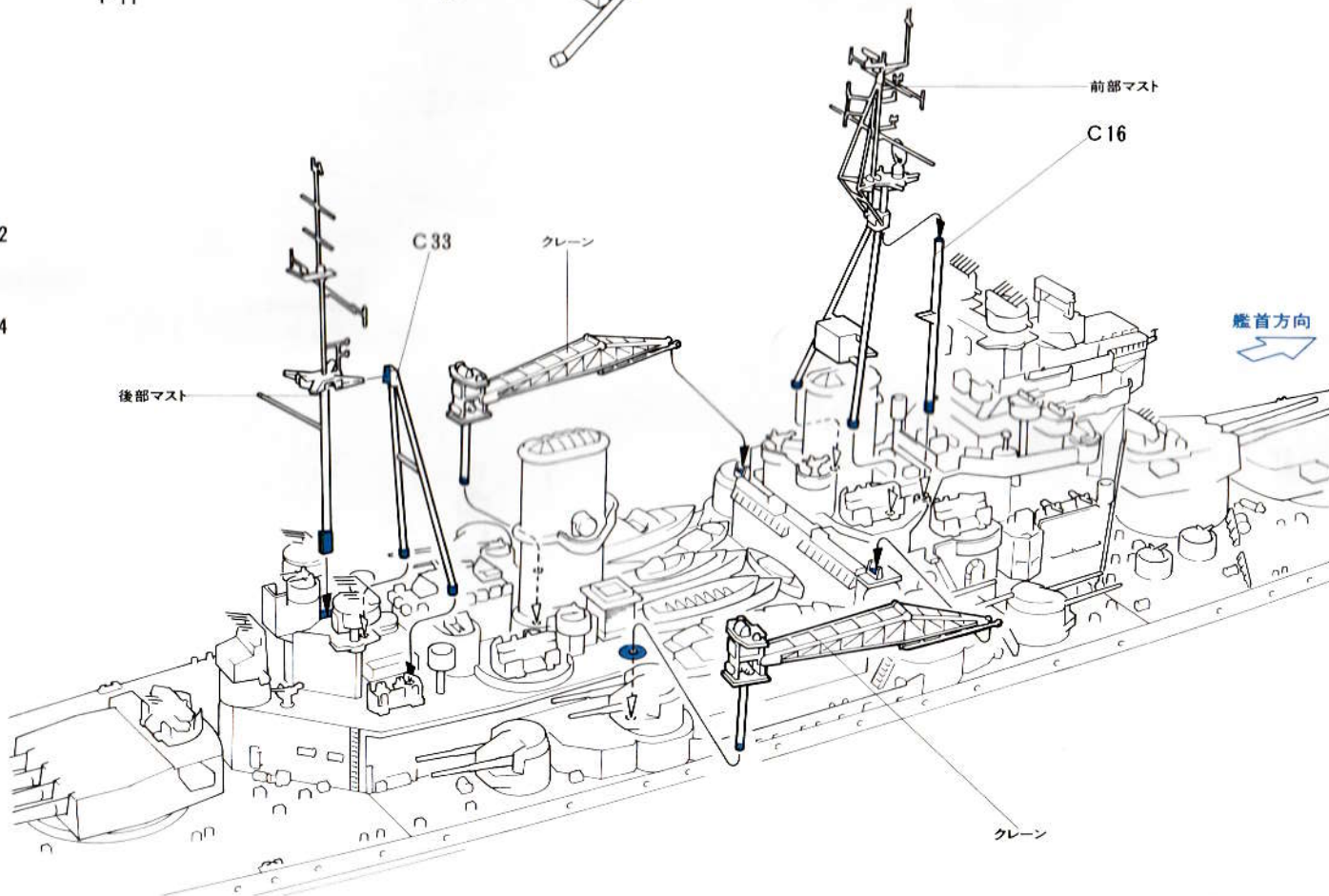
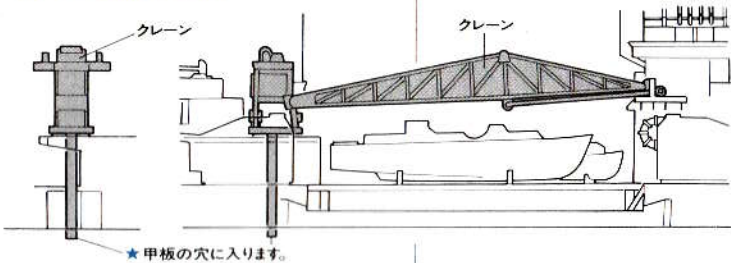
23 《マストのとりつけ》

《クレーンのくみため》

★2個作ります。



《クレーンのとりつけ》



PAINTING

〈キング・ジョージ5世の塗装について〉

1943年、イギリス海軍省は、それまで雑多に実施されていた艦船の迷彩を整理統合。約20種の迷彩塗装例と色見本片、それに、迷彩や色合いに関する理論を示す、マニュアルを完成させました。

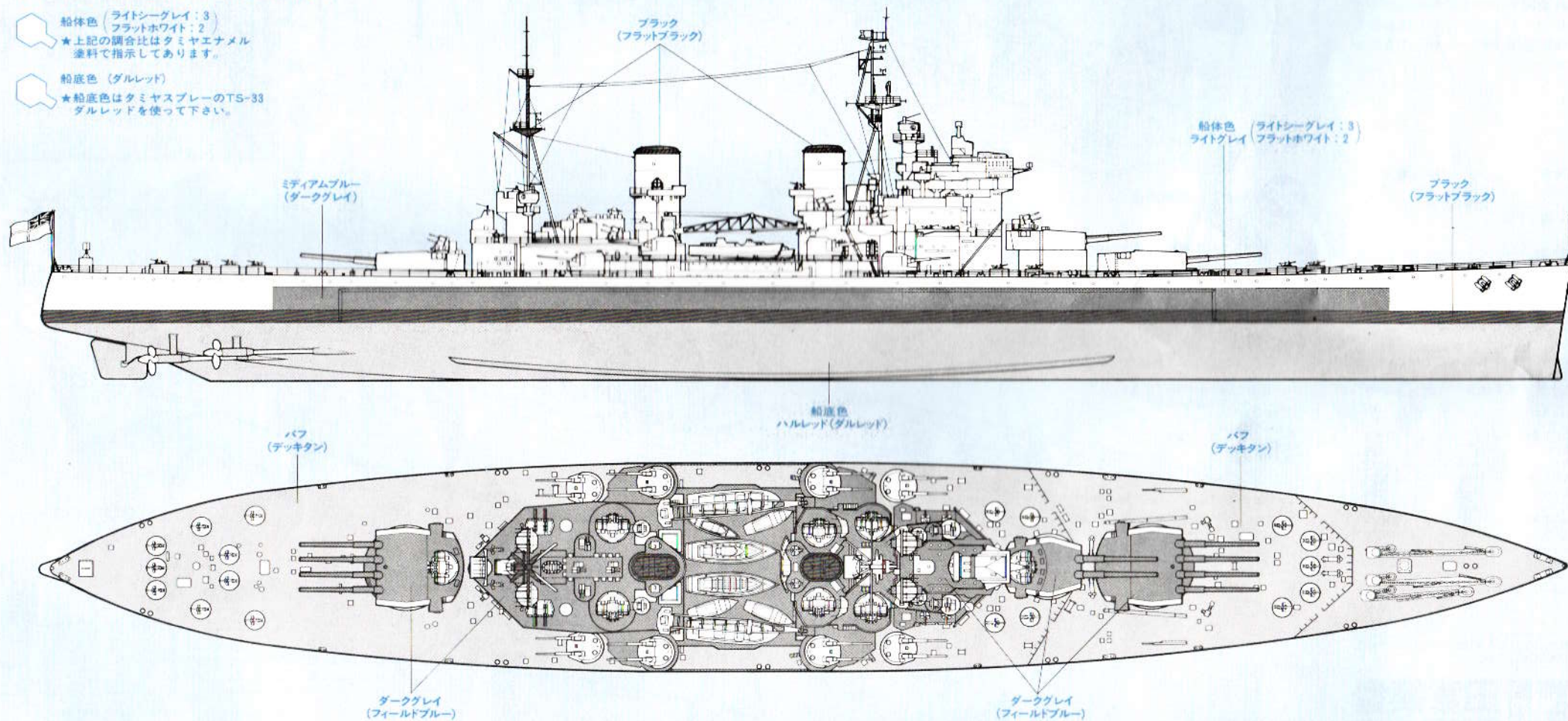
1945年中ごろのキング・ジョージ5世は、マニュアルに従った Admiralty Standard type B が実施されていました。

船体はライトグレーで、水線甲帯を中心に前後をミディアムブルーで迷彩。上部構造物のうち、垂直面は船体と同じライトグレーで、鉄製甲板やブラットホームなどの水平面はダークグレーでし

★下図の()内の色名はタミヤカラーの色名です。

船体色 (ライトシーグレイ:3)
フラットホワイト:2
★上記の割合はタミヤエナメル
塗料で指示してあります。

船底色 (ダルレッド)
★船底色はタミヤスプレーのTS-33
ダルレッドを使って下さい。



た。また、14インチ及び5.25インチ砲塔頂部、14インチ砲身上部1/3もダークグレーです。

全面板張りの甲板は、モデルでは、白っぽいワフで塗るとリアルに仕上がるでしょう。なお、水面下はハルレッド、水線部は黒のストラップが塗装されています。

機銃、哨戒艇、カッターなど、細部の塗装については、組み立て図中に指示しています。

ベースが大きいだけに、アクセントをつけると、作品がより見ごたえあるものになります。手軽なのが「スミ入れ」です。彫刻線に沿って、うすめた黒を流し込むと、細部のコントラストがはっきりします。また、サビの感じは、赤やオレンジで表現できるでしょう。船の写真や、実物の船などを参考にして、実感あふれる汚し塗装に、ぜひチャレンジして下さい。

〈使用する塗料〉

ダルレッド	TS-33
ガンメタル	X-10
ゴールドリーブ	X-12
フラットブラック	XF- 1
フラットホワイト	XF- 2
シーブルー	XF-17
ダークグレー	XF-24
ライトシーグレイ	XF-25
フィールドブルー	XF-50
デッキタン	XF-55
メタリックグレイ	XF-56
ジャーマングレイ	XF-63

色の正確なタミヤカラーをご利用下さい。なお、塗装には必ず、プラスチックモデル用塗料を使用し、十分換気に気をつけて下さい。

〈旗のとつけ〉

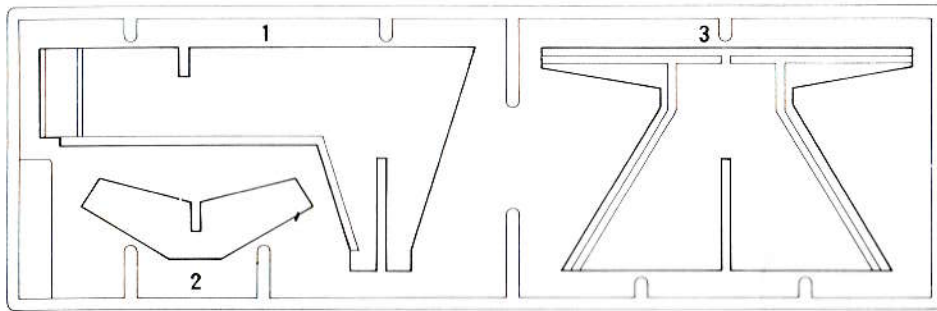
平常航海時には艦尾旗竿に海軍旗（ホワイトエンサイン）、前部マストシグナルハリヤードに国旗（ユニオンジャック）と将官旗がとりつけられています。旗艦のときには将官旗が前部マスト上部にうつされました。また、港に入るときには艦首旗竿にも国旗がとりつけられていました。マークのニス部をきれいに切りとり、旗竿又はシグナルハリヤードをささむようにしてとりつけて下さい。



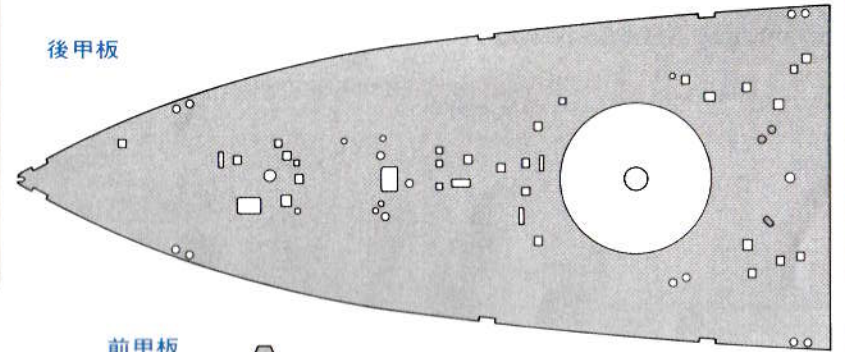
PARTS

A 部品 (2枚)

フラット
ブラック

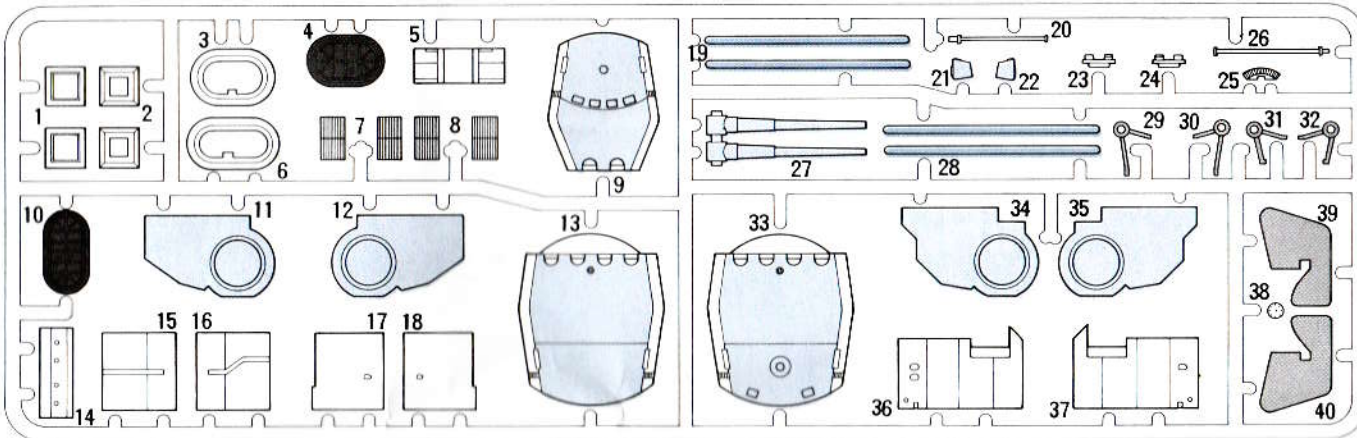


後甲板

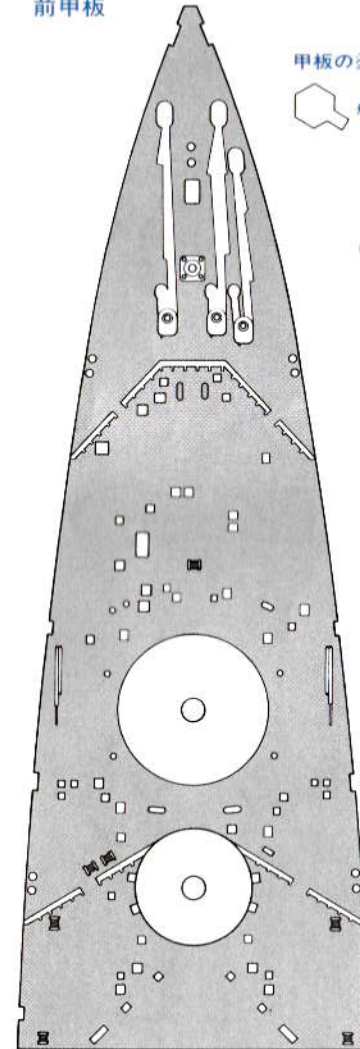


B 部品

船体色 船底色 フィールドブルー ゴールドリーフ フラットブラック



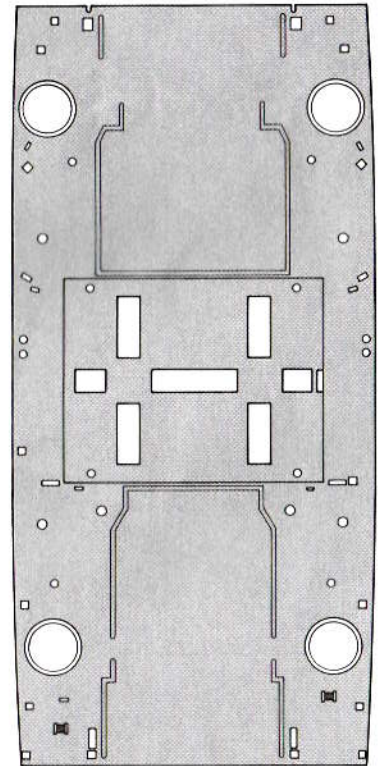
前甲板



甲板の塗装色

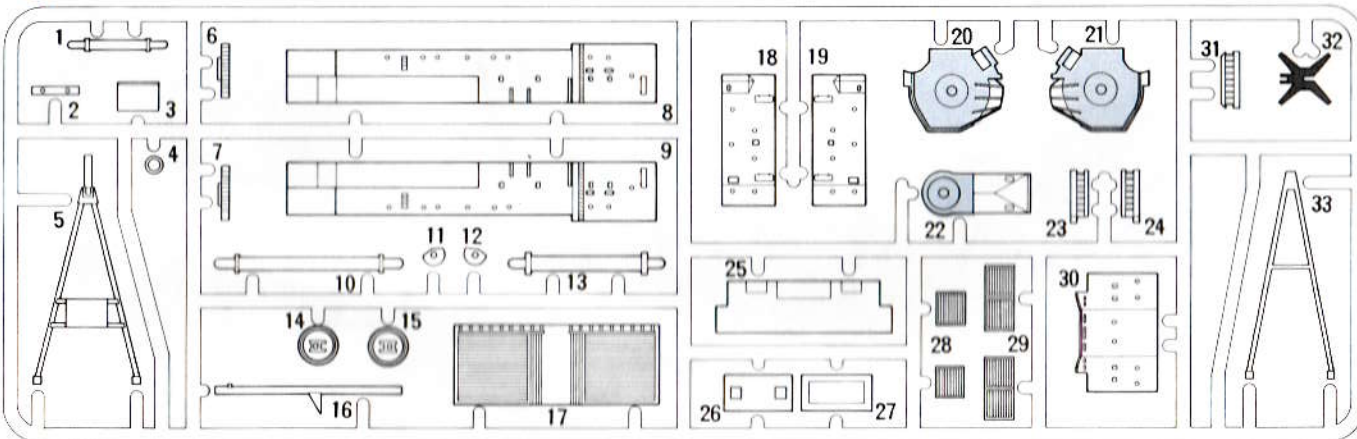
船体色 デッキタン メタリックグレイ

中央甲板



C 部品








船体色 フィールドブルー フラットブラック

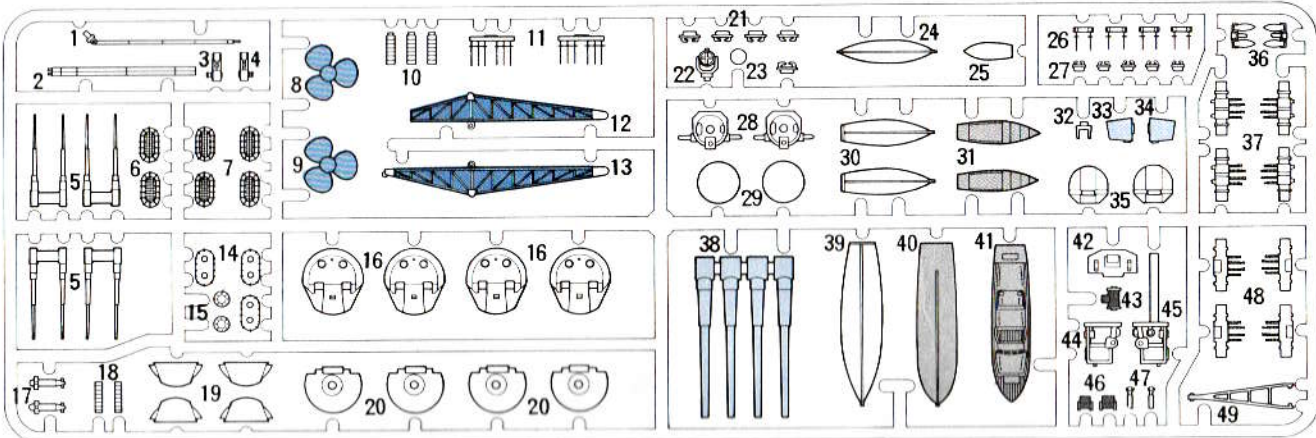


PARTS




D 部品 (2枚)

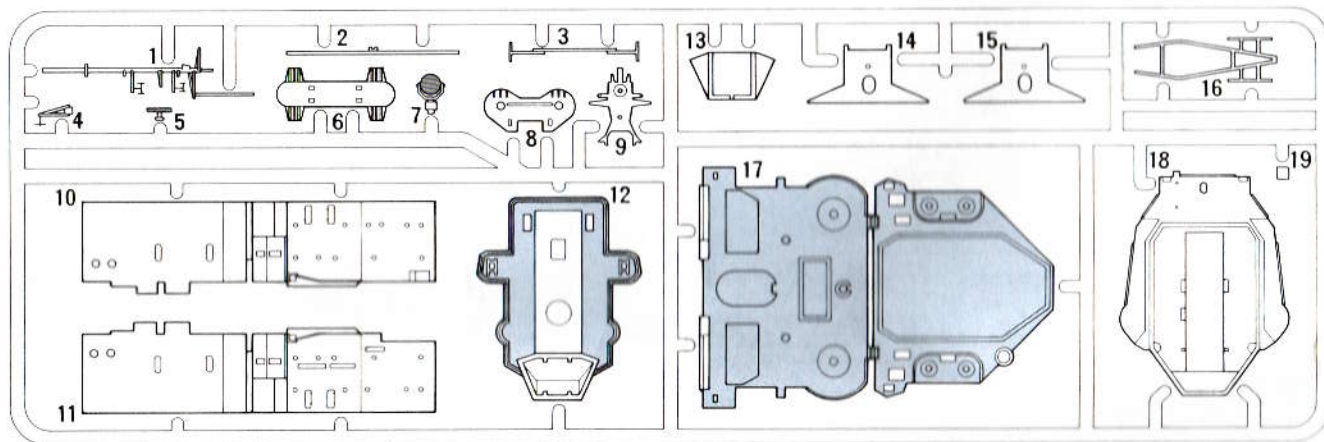
船体.....×1
マーク.....×1

-  船体色
-  フラットホワイト
-  ゴールドリーフ
-  フィールドブルー
-  ジャーマングレイ
-  ガンメタル
-  メタリックグレイ






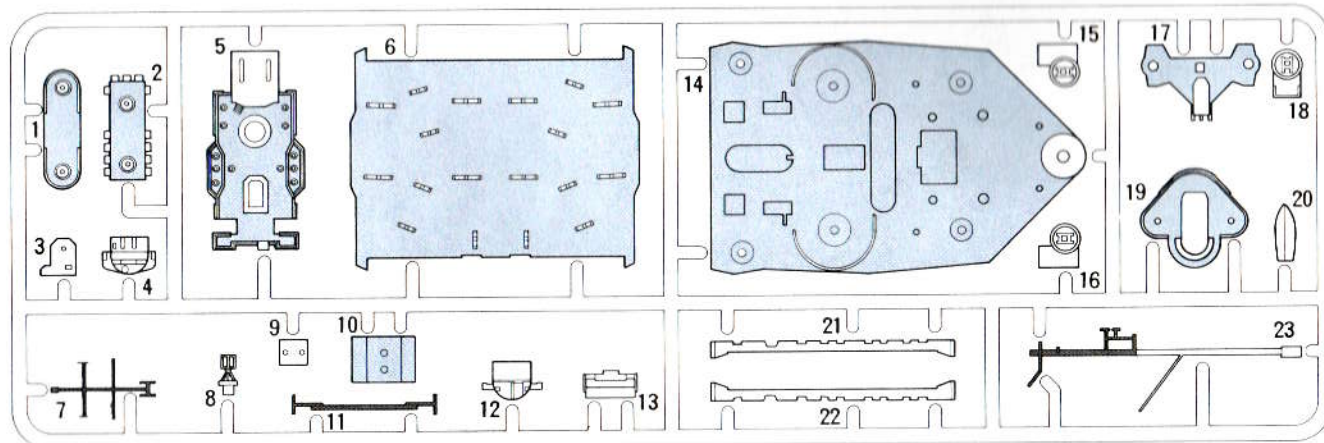
E 部品

-  船体色
-  フィールドブルー
-  ダークグレイ







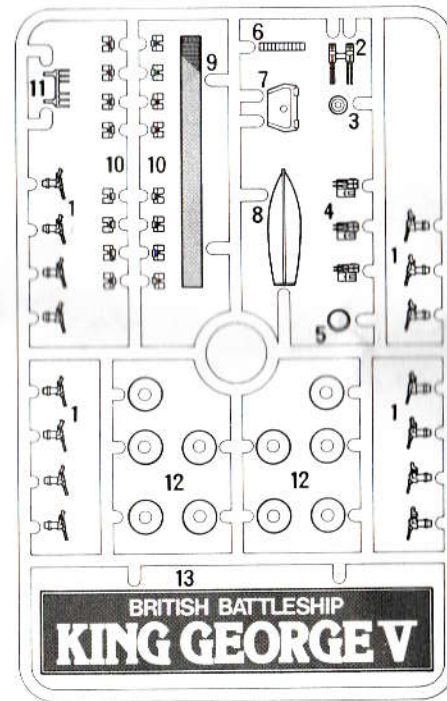
F 部品

-  船体色
-  フィールドブルー
-  フラットブラック



G 部品 (2枚)

-  船体色
-  ガンメタル
-  デッキタン
-  フラットブラック



BRITISH BATTLESHIP
KING GEORGE V